(一〇) 故桂公爵記念事業會寄附金……一五
(一一) 子爵夫人末松生子寄附金……一六
(一二) 松方公爵米壽祝賀會寄附金……一七
同追加寄附金ノ一……一八
同追加寄附金ノ二……一八
(一三) 財團法人原田積善會寄附金……一八
(一四) 高峰保全株式會社寄附金……一九
(一五) 三共株式會社寄附金……一九
(一六) 大阪毎日新聞社長寄附金……一九
(一七) メンデンホール寄附金……一〇
(一八) 小池厚之助寄附金……一一
同追加寄附金……一二
(一九) 岡野飾寄附金……一二
同追加寄附金……一三
(二〇) 小津清左衞門寄附金……一三
(二一) 中澤つる寄附金……一三
(二二) 古籍篇刊行會記念奬學資金……一三
同追加寄附金……一四

(二三) 昭和六年度研究費補助事項……一四
(二四) 萬國學士院聯合會共同事業……一九
附　錄……一九
有栖川宮記念學術奬勵資金……一九
東照宮三百年祭記念會奬學事業……二〇
本院調査事業報告……二三
研究費補助事項報告……二三

凡例

一、本院ニ於ケル學術研究奬勵資金ニシテ、賞又ハ研究費補助ニ充ツヘキモノト、學生奬學ノ目的ニ使用スヘキモノトヲ問ハス、之ニ關スル事項ハ、總テ其ノ要領ヲ本冊子ニ採錄シ、更ニ高松宮家及東照宮三百年祭記念會ノ委囑ニ係ル研究費補助ノ推薦ニ關スル事項モ亦之ヲ本冊子ニ記ス。

一、賞ハ、本院會員ノ推薦ニ依リ、會員ニ非サル者ニ之ヲ授ク。

一、研究費補助ハ、本院會員タルト否トニ拘ラス、一般ニ之ヲ與フ、但シ會員ニ非サル者ノ場合ニ於テハ、會員又ハ官公私立大學ノ總長若クハ學長ノ推薦ニ依ル。

一、研究費補助ノ推薦書ニハ、研究者ノ氏名及職名、研究題目、研究事項ノ概要、所要ノ補助金額及其ノ用途細目ヲ明記シ、又繼續補助ノ要否ニ拘ラス、審査上參考トナルヘキ既成研究ノ報告ハ之ヲ推薦書ニ添附スヘシ。

一、既ニ研究費補助ヲ受ケタル者ニシテ、之カ繼續ヲ要スル場合ニハ、其ノ旨ヲ記シ補助ヲ受ケタル研究ノ經過報告ヲ申込書ニ添ヘ、前推薦者經由ノ上毎年新ニ提出スヘシ。

一、特別ノ場合ヲ除ク外、研究費補助ハ、一般ニ三年以上ニ亘ルコトヲ得ス、高松宮家及東照宮三百年祭記念會ニ推薦事項亦同シ。

一、研究費ノ補助ヲ受ケタル者ハ其ノ年十二月末日迄ニ必ス研究ノ經過報告ヲ提出スルコト。

一、研究結了後直ニ其ノ成績報告ヲ提出スルコト。

一、前二項ノ報告以外ニ重要ナル學術業績ノ概要ヲ隨時本院總會ニ於テ發表スルコト但シ此ノ場合ニハ本院會員ノ紹介ヲ要シ且其ノ概要ハ本院刊行ノ Proceedings of the Imperial Academy ニ掲載ノ都合上英、佛、獨文ノ一ヲ以テ綴リ語數ハ約一千五百以内タルヘキコト。

一、補助ヲ受ケタル研究ノ成績ヲ發表スルトキハ、補助ヲ受ケタル旨ヲ明記シ、且ツ本院補助ニ依リ出版セラレタルモノハ、必ス一部本院ヘ寄贈スルコトヲ要ス。

一、學生ニ奬學費若クハ奬學品ヲ授與スルハ、官公私立大學ノ總長若クハ學長ノ推薦ニ依ル。

一、推薦書ハ凡テ院長ニ宛テ、且左ノ區別ニ依リ期日迄ニ本院ニ到着スル樣、之ヲ送附スルコトヲ要ス。

研究費補助ニ關スルモノ　毎年十二月末日

本院ヨリ補助ヲ受ケントスル場合　同　十月末日

高松宮家ヨリ補助ヲ受ケントスル場合　同　十二月末日

東照宮三百年祭記念會ヨリ補助ヲ受ケントスル場合　同　五月末日

奬學費若クハ奬學品授與ニ關スルモノ

一、研究費補助ノ繼續ヲ要スル場合ノ申込書ハ、前項ノ區別ニ從ヒ夫々其ノ期日迄ニ之ヲ提出スルコトヲ要ス。

一、補助金請求書ハ、院長ニ宛テ直接本院ニ提出セラルヘシ。

一、本院ノ推薦ニ依リ、高松宮家又ハ東照宮三百年祭記念會ヨリ研究費ノ補助ヲ受ケタル場合モ、其ノ研究報告ヲ毎年十二月中ニ本院ヲ經テ高松宮家又ハ東照宮三百年祭記念會ヘ提出スヘシ。

一、推薦書樣式ハ申込ニヨリ送附ス。

昭和六年四月

注意 前項提出時期中十二月末日トアル分ハ、成ルヘク十二月中旬頃迄ニ提出セラレンコトヲ希望ス。

學術研究奬勵資金幷ニ之ニ依ル事業

（昭和五、六年度）

皇室御下賜金ノ一

皇室ヨリ、學術奬勵ノ思召ヲ以テ、明治四十三年以降十箇年間、年々金貳千圓ヲ下賜セラレ、引續キ昭和五年以降十箇年間、年々金貳千圓ヲ下賜セラレタルモノニシテ、賞典資ニ充ツ。

右御下賜金ヲ以テセル恩賜賞ハ、昭和五年度ニ於テ左ノ通授與セリ。

日本人の動脈系統　醫學博士　足立文太郎

皇室御下賜金ノ二

皇室ヨリ學術研究御奬勵ノ思召ヲ以テ、大正九年一月以降、年々一月金壹萬圓ツツ下賜セラレ、更ニ昭和六年一月金壹萬圓ヲ下賜セラレタルモノニシテ、學術研究ノ資ニ充ツ。

右御下賜金ノ一部ヲ帝室制度ノ歴史的研究ノ資ニ充テ、本院ノ事業トシテ該研究ヲ遂行スルコトトシ、本院會員中ヨリ左ノ通擔當委員ヲ選定セリ。

主任　文學博士　三上參次
法學博士　美濃部達吉
文學博士　服部宇之吉
文學博士　和田英松

右擔當委員ノ外、同研究調査囑託員左ノ如シ。

文學博士　山本信哉　田邊勝哉　淺野長武
文學博士　諸橋轍次　龍肅　芝葛盛
黒井大圓　藤原猶雪　高橋隆三
武田政一

御下賜金ノ他ノ一部ハ、一般學術研究奬勵資金トシテ、本院會員其他ノ研究費補助ニ充ツ。

寄附金

(一) 男爵三井八郎右衞門寄附金

男爵三井八郎右衞門ヨリ、明治四十四年以降十箇年間、毎年金壹千圓ツツ、合計金壹萬圓、大正十年以降十箇年間、毎年金壹千圓ツツ、合計金壹萬圓、更ニ三井合名會社々長ヨリ昭和六年以降十年間毎年金壹千圓ツツ、合計金壹萬圓ヲ寄附セルモノニシテ、寄附ノ條件ニ依リ、之ヲ第二部ニ屬スル賞典資ニ充ツ。

(二) 三菱合資會社寄附金

三菱合資會社々長男爵岩崎久彌ヨリ、明治四十四年以降十箇年間、毎年金壹千圓ツツ、合計金壹萬圓、又同會社々長男爵岩崎小彌太ヨリ、大正十年以降十箇年間、毎年金壹千圓ツツ、合計金壹萬圓ヲ寄附セルモノニシテ、寄附ノ條件ニ依リ之ヲ賞典資ニ充ツ。

前記三井岩崎兩男爵ノ寄附金ヲ以テセル帝國學士院賞ハ、昭和五年度ニ於テ、左ノ通授與セリ。

瀨戸内海ノ潮汐及潮流ニ關スル研究　理學博士　小倉伸吉

(三) 工學博士藥學博士高峰讓吉寄附金

工學博士藥學博士高峰讓吉ヨリ、大正元年、金五千圓ヲ寄附シ、元金ハ之ヲ保存シ、之ヨリ生スル利子收入ヲ一般學術研究費補助ニ充テ、使用方法ハ本院ニ一任スルモノトス。

(四) 男爵住友吉左衞門寄附金

男爵住友吉左衞門ヨリ、大正元年以降十箇年間、毎年金壹千圓ツツ、合計金壹萬圓、更ニ大正十一年以降十箇年間（後昭和二年以降二ケ年ニ納入ス）、毎年金壹千圓ツツ、合計金壹萬圓ヲ寄附シ、其ノ使用方法ハ本院ニ一任セルモノニシテ、之ヲ一般學術研究費補助ニ充ツ。

(五) 男爵古河虎之助寄附金

男爵古河虎之助ヨリ、大正二年以降十箇年間、毎年金壹千圓ツツ、合計金壹萬圓、更ニ大正十二年以降十箇年間、毎年金壹千圓ツツ、合計金壹萬圓ヲ寄附シ、其ノ使用方法ハ本院ニ一任セルモノニシテ、之ヲ一般學術研究補助ニ充ツ。

（六）男爵藤田平太郎寄附金

男爵藤田平太郎ヨリ、大正四年、金貳萬貳千圓ヲ寄附セルモノニシテ、寄附ノ條件ニ依リ、金貳千圓ヲ羅馬法學書出版補助費トシテ使用シ、金壹萬圓ヲ羅馬法學奬學基金ニ、金壹萬圓ヲ採鑛冶金學及關係學科奬學基金トシ、各奬學基金ヨリ生スル利子收入ヲ東京帝國大學及京都帝國大學ノ大學院又ハ學部在學中ノ學生ノ奬學費ニ充ツ、右奬學費ノ給與ニ關スル本院ノ決議事項左ノ如シ。

一、男爵藤田平太郎寄附ノ奬學費ハ其ノ指定セラレタル用途ノ範圍ニ於テ有望ナル研究者ニ之ヲ與フ

二、奬學費ヲ受クヘキ者ノ選定ハ部會ノ決議ニ依ル、部會ノ決議ハ部長之ヲ總會ニ報告ス

三、奬學費ヲ受クヘキノ者ノ數ハ各部ニ於テ毎年之ヲ定ム

奬學費ハ一人一箇年參百圓トス、但シ更ニ其ノ支給ヲ繼續スルコトヲ得

四、奬學費ヲ受ケタル者ノ氏名ハ寄附者ニ之ヲ報告ス

昭和五年度ニ於ケル右奬學費受費者左ノ如シ、

羅馬法學奬學費

東京帝國大學法學部學生　田子奬

京都帝國大學法學部學生　谷口左紀雄

東京帝國大學大學院學生　吉城肇蔚

同　理學部學生　渡邊武男

採鑛冶金學及關係學科奬學費

（七）三井合名會社寄附金

三井合名會社々長男爵三井八郎右衞門ヨリ、大正五年、出版費トシテ左ノ通、金參千圓ヲ寄附セルモノナリ。

金壹千圓　大日本數學史ノ增補出版費

金貳千圓　伊能忠敬測地事蹟調査事項出版費

（八）山下龜三郎寄附金ノ一

山下龜三郎ヨリ、大正五年以降十箇年間、毎年金壹千圓ツツ、合計金壹萬圓ヲ寄附セルモノニシテ、寄附ノ條件ニ依リ、之ヲ船舶航海其他之ニ關スル學術研究ノ資ニ充ツ。

但シ右金額ノ納付方法ハ、使途ノ狀況ニ依リ隨時之ヲ變更スルコトヲ得。

（九）山下龜三郎寄附金ノ二

山下龜三郎ヨリ、大正十二年以降十箇年間、毎年金壹千圓ツツ、合計金壹萬圓ヲ寄附セルモノニシテ、國際關係ノ學事費ニ使用ス。

（一〇）故桂公爵記念事業會寄附金

故桂公爵記念事業會總代男爵澁澤榮一ヨリ、大正六年、金貳萬圓ヲ寄附セルモノニシテ、寄附ノ條件左ノ如シ。

元金ハ桂學術奬勵基金トシテ保存シ之ヨリ生スル利殖金ノ全部又ハ一部ヲ

一、學術研究ニ依リ社會ニ多大ノ貢獻ヲ爲シタリト認メラルヽ者ニ賞トシテ與フルカ又ハ

二、學術研究費補助トシテ使用シ

三、孰モ桂學術奬勵金ニ擔リタルコトヲ表明スルコト但シ場合ニ依リ

（一）若クハ（二）ヲ選行シ又ハ二者ヲ併行スルハ帝國學士院ノ任意タルヘキコト

（一一）子爵夫人末松生子寄附金

子爵夫人末松生子ヨリ、大正七年、羅馬法奬勵基金トシテ、有價證券額面金五千百圓ヲ寄附セルモノニシテ、寄附ノ條件左ノ如シ。

基金ノ利殖金ヲ以テ、毎年若干宛羅馬法律書ヲ購入シ、適宜ノ方法ニ依リ、可然學生ニ之ヲ分與シ、又ハ場合ニ依リ相當ノ圖書館ヲ選定シテ之ニ寄贈スヘキコト、尚ホ必要ノ場合ニハ右法律書ノ印刷費ニ充ツルコト。

右基金利子ノ使途ニ關スル本院ノ決議事項左ノ如シ。

一、子爵夫人末松生子寄附羅馬法奬勵基金ハ其ノ利子ノ一部ヲ以テ羅馬法律書籍ヲ購入シ奬學品トシテ各官公私立大學中羅馬法ヲ教授セル各大學ノ大學院、研究科又ハ法科大學在學中ノ學生ニ與フルモノトス但シ適當ト認ムル他ノ學生ニ與フルコトアルヘシ

尚ホ場合ニ依リ相當ノ圖書館ヲ選定シ之ニ寄贈スルコトヲ得

利殖金ノ他ノ一部ハ之ヲ積立テ羅馬法律書籍ノ出版費トシテ使用スヘキモノトス

二、奬學品ヲ受クヘキ者及書籍ヲ寄贈スヘキ圖書館ノ選定ハ第一部々長ノ銓考ニ依ル但シ銓考事項ハ之ヲ部會及總會ニ報告スヘシ

奬學品ヲ受クヘキ者及書籍ヲ寄贈スヘキ圖書館ノ數並ニ出版費トシテ積立テ置クヘキ金額ハ相當ノ範圍ニ於テ毎年之ヲ定ム

三、奬學品ヲ受ケタル者ノ氏名及書籍ヲ寄贈シタル圖書館ノ名ハ之ヲ寄附者ニ報告スヘシ

右基金ノ利殖金ヲ以テ購入セル羅馬法奬學品ハ昭和五年度ニ於テ左記ノ通リ授與セリ。

東京帝國大學法學部學生　福井勇三郎　田子奬　本城直彦

京都帝國大學法學部學生　石井良助　金原敬　永田大二郎

京都帝國大學法學部學生　於保不二雄　綿谷偕次　野口重之

京城帝國大學法文學部學生　谷口左紀雄　栗原寛

早稲田大學法學部法律學科學生　長谷川建夫　張厚永　相原俊雄

坂本榮一　渡邊秀高

（一二）松方公爵米壽祝賀會寄附金

松方公爵米壽祝賀會發起人總代法學博士男爵阪谷芳郎並ニ平山成信ヨリ、松方公爵米壽祝賀記念奬學基金トシテ、大正十一年、金拾八萬圓ヲ寄附セルモノニシテ、寄附ノ條件左ノ如シ。

一、本資金ハ適當ノ方法ヲ以テ之ヲ利殖スルコト

二、元金ハ永ク之ヲ保存シ其ノ利子ノミヲ使用スルコト

三、利子ハ主トシテ財政、經濟、農業及漢學ニ關スル研究ノ補助褒賞等ニ使用スルコト

四、前項以外タリトモ帝國學士院ニ於テ適當ト認メタル事業ニ利子ヲ使用スルハ妨ナキコト

五、利子ヲ以テ施行シタル事項ハ毎年之ヲ松方公爵家ニ報告スルコト

右基金ノ使途ニ關スル本院ノ決議事項左ノ如シ。

一、松方公爵米壽祝賀會寄附ノ奬學資金ハ寄附ノ條件ニ從ヒ元金ハ永ク保存シテ之ヲ利殖シ其ノ利子ヲ奬學費ニ充ツ

二、奬學費ハ主トシテ財政、經濟、農業及漢學ニ關スル學科ノ研究費、褒賞費、講義費、學生費、出版費等ニ充テ其ノ他本院ニ於テ適當ト認ムル事業ニ之ヲ使用ス

三、奬學費使途ノ事項ニハ「松方記念」ノ稱ヲ冠ス

四、奬學費ノ使途並ニ其ノ受領者ノ選定ハ當該部會ノ決議ニ依ル部會ノ決議ハ部長之ヲ總會ニ報告ス

五、奬學費ヲ以テ施行シタル事項ハ毎年之ヲ松方公爵家ニ報告ス

同　追加寄附金ノ一

松方公爵米壽祝賀會發起人總代平山成信ヨリ、大正十二年四月、金五千四百五十四圓ヲ寄附セルモノニシテ、松方公爵米壽祝賀記念奬學資金ヨリ生スル利子ニ加ヘ、奬學ノ目的ニ使用ス。

同　追加寄附金ノ二

松方公爵米壽祝賀會殘務整理委員男爵阪谷芳郎ヨリ、大正十二年五月、金五百六十圓ヲ寄附セルモノニシテ、松方公爵米壽祝賀記念奬學資金ヨリ生スル利子ニ加ヘ使用ス。

（一三）財團法人原田積善會寄附金

財團法人原田積善會理事原田二郎ヨリ、大正十二年以降壹百箇年間、毎年金壹萬圓ッツ（四月及九月ノ二期ニ分納）、合計金壹百萬圓ヲ寄附セルモノニシテ、寄附ノ條件左ノ如シ。

一、金壹萬圓ノ内金二千圓ハ之ヲ原田二郎奬學基金トシテ積立テ適當ノ方法ヲ以テ永遠ニ利殖スルコト但シ五十年後ニアリテハ右基金ヨリ生スル利子ヲ帝國學士院ニ於テ適宜使用スルモ妨ナキコト

二、金壹萬圓ノ内金八千圓ハ毎年奬學ノ爲使用スルコトヽシ其ノ方法ハ總テ帝國學士院ニ一任スルコト

三、本寄附金ニ依リ施行シタル事項ハ毎年之ヲ原田積善會ヘ報告スルコト

（一四）高峰保全株式會社寄附金

故工學博士藥學博士高峰讓吉ノ遺志ニ依リ、高峰保全株式會社取締役鹽原又策ヨリ、大正十二年以降五箇年間、毎年金五千圓ッツ（一月及七月ノ二期ニ金貳千五百圓ッツ分納）、合計金貳萬五千圓ヲ寄附セルモノニシテ、寄附ノ條件左ノ如シ。

一、寄附金ハ基金トシテ之ヲ保存シ之ヨリ生スル利殖金ハ學術研究ノ資又ハ賞トシテ之ヲ使用スルコト

二、利殖金使途ノ事項ニハ適當ナル名稱ヲ付スルコト

三、利殖金ハ大正十三年度ヨリ之ヲ使用スルコト

（一五）三共株式會社寄附金

三共株式會社取締役鹽原又策ヨリ、大正十二年十二月金壹千圓、同十三年十二月金五百圓、同十四年十二月金五百圓、合計金貳千圓ヲ寄附セルモノニシテ、前記高峰保全株式會社寄附金ヨリ生スル利殖金ノ年額壹千圓ニ達スルニ至ル迄ノ間、右利殖金ノ補充トシテ之ニ組入レテ使用ス。

（一六）大阪毎日新聞社長寄附金

大阪毎日新聞社長本山彦一ヨリ、東宮御成婚記念學術奬勵資金トシテ、大正十三年以降十箇年間、毎年金壹萬圓ツヽ、合計金拾萬圓ヲ寄附セルモノニシテ寄附ノ條件左ノ如シ。

一、毎年金一萬圓ノ内四千圓ハ賞金トシ金六千圓ハ研究資金トシテ之ヲ使用セラレタキコト

二、賞ハ「大阪毎日新聞東京日日新聞寄附東宮御成婚記念賞」ト稱シ賞牌及賞記ト共ニ金壹千圓宛四人ニ之ヲ授與セラレタキコト但シ賞牌ノ制式ハ貴院ニ一任スルコト、シ其ノ作製ニ要スル費用ハ別ニ本社ヨリ之ヲ貴院ニ納付ス

三、受賞者ナキトキハ賞金ノ一部又ハ全部ヲ選次翌年ニ繰越シテ使用セラルヽモ妨ナキコト

四、研究資金ノ使用方法ハ之ヲ貴院ニ一任スルモ該資金使途ノ事項ニハ「大阪毎日新聞、東京日日新聞寄附東宮御成婚記念」ノ稱ヲ冠セラレタキコト

右使途ニ關スル本院ノ決議事項左ノ如シ。

一、大阪毎日新聞社長本山彦一寄附東宮御成婚記念學術奬勵資金ノ内ヲ以テセル學術研究資金ニハ「大阪毎日新聞東京日日新聞寄附東宮御成婚記念」ノ稱ヲ冠シ該資金使途ノ事項ニハ之ニ依リタル旨ヲ表明スルコト

二、研究資金ヲ受クヘキ者ノ選定ハ部會ノ議ヲ經テ總會ニ於テ之ヲ決定ス

三、研究資金ヲ受ケタル者ノ氏名及研究事項ハ毎年之ヲ大阪毎日新聞、東京日日新聞兩社ニ報告ス

前記本山大阪毎日新聞社長ノ寄附金ヲ以テセル大阪毎日新聞東京日日新聞寄附東宮御成婚記念賞ハ昭和五年度ニ於テ左ノ通授與セリ。

小惑星の發見　及川奥郎

（一七）メンデンホール寄附金

米國人トマス、メンデンホールノ遺言ニ依リ、同人息チヤールス、メンデンホールヨリ、大正十四年米貨貳千五百弗ヲ寄附セルモノニシテ、天文學及物理學ニ關スル奬學費ニ充ツ。

右資金ノ使途ニ關スル本院ノ決議左ノ如シ。

一、米國人故トーマス、メンデンホールノ遺言ニ依リ本邦理學及教育ノ明治初年ニ於ケル發達ト故人トノ關係ヲ記念センガ爲メニ寄附セル、奬學資金ノ元金ハ永久ニ保存シテ之ヲ利殖シ其ノ利子ヲ奬學費ニ充ツ

二、奬學費ハ大正十四年以降五箇年毎ニ其ノ期間ニ於テ物理學又ハ天文學上顯著ナル貢獻ヲナシタル日本人ヲ褒賞スルガ爲メニ使用ス

賞ハ金牌ニ賞記及賞金ヲ添ヘテ之ヲ授ク

三、前記期間ニ於テ賞ノ適當ナル目的物ナキトキニ限リ利殖金ハ之ヲ物理學又ハ天文學上ノ學術研究費補助、講演、出版等ノ費用ニ充ツルコトヲ得此場合ニ於ケル奬學費ノ使途ハ第二部々會ノ決議ニ依ル、部會ノ決議ハ部長之ヲ總會ニ報告ス

四、奬學費途ノ事項ニハ「メンデンホール記念」ノ稱ヲ冠ス

（一八）小池厚之助寄附金

小池國三ノ遺志ニ依リ、同人息小池厚之助ヨリ、大正十四年五月金參拾萬圓ヲ寄附セルモノニシテ、寄附ノ條件左ノ如シ。

一、寄附金總額ハ之ヲ基金トシ永久ニ保存シ適當ノ方法ヲ以テ之ヲ利殖スルコト

二、右基金ヨリ生スル利子ハ之ヲ貴院ノ選定ニ依ル學術研究ノ補助資金ニ充ツルコト

三、右基金ヨリ生スル利子ノ中ヨリ毎年金參千圓ヲ控除シ其ノ殘額ノ一半ハ醫學ノ研究補助費ニ充テ他ノ半額ハ一般研究ノ補助費ニ充ツヘキ事

四、上記控除セル金參千圓ハ特別補助資金トシテ毎年度之ヲ積立テ利殖シ特ニ多額ノ資金ヲ投スルニアラサレハ研究ヲ爲シ得サルカ如キ特殊重要ナル事項ノ出現ヲ俟テ之ニ十分ナル補助ヲ與フル事

右基金ノ使途ニ關スル本院ノ決議左ノ如シ。

一、小池厚之助寄附奬學資金ハ寄附ノ條件ニ從ヒ其ノ總額ヲ基金トシテ永久ニ保存利殖シ其ノ利子ヲ研究費補助ニ充ツ

二、基金ヨリ生スル利子ノ中毎年度金參千圓ヲ控除シ特別補助資金トシテ之ヲ積立利殖シ殘餘ノ利子ノ一半ハ醫學ノ研究費ニ充テ他ノ一半ハ一般研究費補助ニ充ツ

三、特別補助資金及其ノ利殖金ハ特別重要事項ノ研究ニシテ特ニ多額ノ補助金ヲ要スルモノニ對シ十分ナル補助ヲ爲サムトスルトキニ限リ之ヲ使用ス

四、研究費補助ヲ受クヘキ者ノ選定ハ本院總會ノ「學術研究費補助ニ關スル決議」ニ依リ之ヲ爲ス

五、研究費補助ヲ受ケタル者ノ氏名ハ其ノ研究事項ト共ニ毎年之ヲ小池家ニ報告ス

同　追加寄附金

小池厚之助ヨリ、學術奬勵費トシテ、大正十五年三月、金壹萬四千七百貳拾圓餘ヲ寄附セルモノニシテ、學術研究費ノ補助ニ充ツ。

（一九）岡野節寄附金

岡野節ヨリ、奬學資金トシテ、大正十五年二月、金五千圓ヲ寄附セルモノニシテ、元金ハ之ヲ岡野奬學基金トシテ、永久ニ保存シ、之ヨリ生スル利子ヲ一般學術研究費ノ補助ニ充ツ。

同　追加寄附金

男爵岡野節ヨリ、學術奬勵費トシテ、大正十五年三月、金參拾貳圓餘ヲ寄附セルモノニシテ、一般學術研究費ノ補助ニ充ツ。

（二〇）小津清左衞門寄附金

小津清左衞門ヨリ、學術奬勵資金トシテ、大正十五年九月、金五千圓ヲ寄附セルモノニシテ、「南朝ノ柱石北畠親房及ヒソノ子孫ノ事蹟」ノ研究費ニ充ツ。

（二一）中澤つる寄附金

中澤房則ノ遺志ニ依リ、中澤つるヨリ、學術奬勵基金トシテ、昭和二年拾月、有價證券額面金壹萬圓ヲ寄附セルモノニシテ、元金ハ之ヲ保存シ、之ヨリ生スル利子ヲ、一般學術研究費ノ補助ニ充ツ。

（二二）古籀篇刊行會記念奬學資金

古籀篇刊行會理事長、子爵渡邊千冬ヨリ、昭和三年七月、金貳萬九千圓ヲ寄附セルモノニシテ、寄附ノ條件左ノ如シ。

一、寄附セントスル所ノ金員ハ古籀篇刊行會記念奬學資金ト稱スルコト

二、古籀篇刊行會記念奬學資金ハ、金參萬圓ニ達スルヲ俟テ、其ノ利子ヲ奬學費ニ充ツルコト、隨テ願書所載ノ金員ハ、金參萬圓ニ達スルマテノ間、貴院ニ於テ據置利殖ノ途ヲ講セラレタキコト

三、前記奬學費ハ、漢學ニ關スル研究、若クハ著作出版ノ補助ニ使用セラレタキコト

同　追加寄附金

元古籍篇刊行會理事、服部宇之吉ヨリ昭和四年五月金七百貳拾五圓ヲ寄附セルモノニシテ前項寄附金ニ加ヘ其ノ利子ヲ奬學費ニ充ツ。

（二三）昭和六年度學術研究費補助事項

前記御下賜金ノ一部、高峰博士寄附金利子、住友男爵寄附金、古河男爵寄附金、松方公爵米壽祝賀會寄附金利子、原田積善會寄附金、高峰保全株式會社寄附金利子、大阪毎日新聞社長寄附金、小池厚之助寄附金利子、岡野節寄附金、中澤つる寄附金及古籍篇刊行會寄附金ノ利子等ヲ以テ、昭和六年度ニ於テ研究費ノ補助ヲ與フルモノ左ノ如シ。

○一般奬學資金ニ依ルモノ

ユースチーニーアーヌス、欽定學說彙纂第六卷邦譯	船田亨二
琉球諸島言語の研究	宮良當壯
古劇研究（歌舞伎以前より元祿劇江戸中世劇迄の研究）	高野辰之
日本兒童の宗教意識の研究	關寬之
摩尼教特に支那に於ける摩尼教の研究	矢吹慶輝
切支丹部落の社會的研究	田北耕也
德川初期我國在留天主教宣教師の編纂印行せし日本字典及び文典に關する國語史的研究	近藤國臣
支那古樂の一般的研究特に古樂に關する文獻の索引の作製	布川壽

支那音樂特に樂律、樂器、樂曲等に關する研究	石井文雄
龍樹及びその時代を中心とせる初期大乘佛教の研究	宮本正尊
關東大地震に於ける房總半島地殼變動の研究	會員 末廣恭二 寺田寅彦
大地溝帶地質構造	
廻折格子の製作	
固體間の反應速度に及ぼすラヂウム放射線	佐藤瑞穂 朝野虎治
火花の遲れ	
北海道に於ける第三紀火山活動の層位學的研究	小川琢治 小本不二男
コンクリート强度を目的とするセメント試驗方法	會員
長鑛狀炭素化合物の結晶構造	
纖維素凝固態の構造	
新らしき容量分析方法	田中良雄 小林芳郎
インダンスレン熔融の化學に關する研究	濱田穆
九州有明海の魚類の研究	牧野行雄
北部九州に於ける洪積期時代陸獸化石の研究	宗宮尙行
干滿潮線間に附着生活を行ふ動物特に穿岩性辨腮類の生態に關する研究	厚木勝基
アラバンの構造式に就いて	田上敏雄
	島山四男
	田丸節郎
	富田一郎 佐藤重男 大谷壽夫
	雨宮育作
	西田屹二

天然絹絲の再生　喜多源逸
寫眞乾板の感光性に關する研究　宮田道雄
朝鮮に於ける寒武利亞系の層序學的研究　中村新太郎
脊椎動物の染色體に關する研究　糞外二内敬名
硝子狀態の研究　菅野和太郎

○松方資金ニ依ルモノ

近江商人の研究　加藤常賢
宗法の研究特に其の實狀の調査　小島昌太郎
本邦に於ける經營統制による產業合理化　宮部金吾
本邦產昆布科の研究　町田次郎
胡蜂の遺傳研究、特に性の決定に就いて　梅谷興七郎
家蠶に於ける雄蛾の退化交尾器に關する遺傳學的研究　增井清
鷄に於ける性の決定及び分化の研究　門前弘多
日本產植物蟲癭研究　杉野目晴貞
カボチヤの黃色色素の研究　葛西勝彌
馬の傳染性流產の感染機轉並に其の豫防法　野原茂六
野生菊屬諸種の遺傳研究　植田宰輔
稻の成長期中各週に於ける成長量の變化に就て　北川松之助
双豆に含有さるゝ新アミノ酸カナバニンに就いて

植物の種々の生理作用と其の營養體部に現はるゝ色素との關係　小坂博
プラシカ屬の細胞學及實驗遺傳學的研究　盛永俊太郎

○大恃資金ニ依ルモノ

朝鮮及滿洲に於ける巫俗の研究　赤秋葉松智
琉球語大辭典　伊波普猷
地震の前後に發生する地形變動の研究　今村明恒
小惑星の運動に就て　平山清次
太陽大氣の一般循環に關する統計的研究　關口鯉吉

○小池資金ニ依ルモノ

朝鮮北部山間地方に於ける地方病的骨關節疾患(土疾)　小川乾
腦間に於ける諸核機能に關する實驗的研究　朴小
細菌に於けるエネルギー發生反應の研究　篠崎哲四郎
表面活性質の生化學　稻田宣男
杭毒素血清の濃縮　藤田秋治
麻刺利亞傳播蚊の習性　鹽野井三郎
　　鹽湯鈴木澤乾
　　柿内三郎
　　小豆畑泉
　　中島久丹
　　小三治
　　小正亘
　　健兒郎

神經系統の新陳代謝の研究　　加藤元一・原島問義

心臟刺戟傳達系の生理に關する研究　　磯村雄一

淋巴管系の研究　　石原誠

組織體外培養の研究特に同法に依る細菌學並に血清學の研究　　木原卓三郎

亞性腫物（特に肉腫）の病理特に組織發生に就て　　木村廉

單一筋纖維の收縮及クロナキシに關する研究　　外研究員

ビウレツト反應を呈するオキシアミノ化合體の研究　　會員　藤浪鑑

淋巴球及淋巴系統の研究　　橋田邦彦

本邦風土及風習に對する和洋兩服裝の衞生學的研究　　富田雅次

黴毒の實驗的研究殊に潛伏性黴毒の諸問題　　長與又郎・外四名

○古文獻篇資金ニ依ルモノ

支那古代銅器及び其の銘文の研究　　戸田正三・外二名

朝鮮文學史及朝鮮學人文集の研究　　松本信一

支那文字の研究　　會員　內藤虎次郎

合計六九件　　此ノ補助金額　四一、五二〇圓　　多田正知

　　飯島忠夫

（二四）前項各奬學事業ノ外ニ萬國學士院聯合會トノ共同事業タル左記事業ヲ遂行シ此ノ諸經費ニモ年々學術研究奬勵金ヲ支出ス

一、我國ト歐米諸國トノ交通資料調査

一、インドネジヤ慣習法辭典編纂

＊　＊　＊　＊　＊

有栖川宮記念學術奬勵資金

高松宮家ニ於テ、有栖川宮記念トシテ學術奬勵資金ヲ設ケラレ、學術上有益ナル研究竝其ノ發表ヲ補助スル爲、奬學資金（年額五、〇〇〇圓）ヲ一月十五日及七月五日ノ二回ニ分チ御授與セラルル趣ヲ以テ、大正十五年十月、右資金受領候補者ノ選定方ヲ本院ニ御依賴アリタルモノニシテ、本院ハ其ノ都度委員ヲ設ケ、期日迄ニ本院ヘ提出セラレタル事項ニ就キテ審査ヲ遂ケ、御授與金額ノ範圍ニ於テ採擇シタル研究事項ヲ宮家ヘ推薦ス、其ノ要項左ノ如シ

一、研究題目ハ日本若クハ東洋ノ文化ニ關スルモノヲ主トスル事、

一、發表竝ニ授與ハ高松宮ニ於テ行ハルヘキコト、

本院ノ推薦ニ依リ昭和五年度ニ於テ有栖川宮記念學術奬勵資金ヲ受ケタル研究事項左ノ如シ。

山陵に對する思想の沿革の研究　　芝葛盛・和田單一

弘明集及廣弘明集ノ研究　常盤大定
國語の表現法と日本人の思想形態に就ての研究　太田悌蔵
列聖及皇族御撰の研究及出版　城戸幡太郎
（以上昭和五年七月御授與ノ分）　和田英松
印度に於ける佛教像と一般神像との關係　逸見梅榮
（密教儀軌及びプラナーを中心としての研究）　秋山謙藏
室町時代に於ける琉球朝鮮及び支那との關係　藤島亥治郎
東洋特に日本の建築技術に關する歴史的研究
（以上昭和六年一月御授與ノ分）

以上七件ニ對スル御授與金額ハ七、五〇〇圓ニ及ヘリ

* * * * *

東照宮三百年祭記念會奬學事業

東照宮三百年祭記念會ヨリ、毎年九月若クハ十月、次年度ニ於ケル新規補助金額ヲ提示シ（昭和六年度分九、〇〇〇圓）、補助ヲ要スル學術研究事項ノ推薦方ヲ本院ヘ依頼セルモノニシテ、本院ハ其ノ都度委員ヲ設ケ、期日迄ニ本院ヘ提出セラレタル事項ニ就キテ審査ヲ遂ケ、補助金額ノ範圍ニ於テ採擇シタル研究事項ヲ同記念會ヘ推薦ス。

本院ノ推薦ニ依リ、昭和六年度ニ於テ、同會ヨリ補助ヲ受クヘキ研究事項左ノ如シ。

本邦天文古記錄の蒐集　平山清次
寺院門前町の研究　神田茂
稻の開花に對する外界の影響に就て　平沼淑郎
蟋蟀科昆蟲に於ける細胞學的并に遺傳學的の研究　立花嘉美
電氣採鑛法に就て　野口彌吉
鋼中に含まれたるマンガン、ニツケルクロームX線的定量分析の研究　大町文衛
靜岡縣下の第三紀層　藤田義象
日光山中諸湖の生物學的調査　志村繁隆
アサガホの諸器官に於ける色素生成に關する生理遺傳學的研究　横山永郎
禾穀類に於ける遺傳學的並に細胞學的實驗　宮地傳三郎
キジムシロ屬に於ける遺傳學的核學的研究　萩原時雄
朝鮮に於ける血液型の研究　西木市三
北部日本に於ける氣候的土壤帶の研究に就て　山原均
細胞及核の分裂の機構　下斗米直昌
田町以男　三宅康信
外名　佐藤武雄
藤井健次郎　若山保ノ照　井田文ノ吉　篠遠喜人

牛乳の組成に關する研究
コベル反應に依る高級炭化水素の合成
昆蟲の營養生理
小麥蛋白に關する研究
本邦產密柑の農業地理學的研究
接觸觸媒作用の物理化學的研究

計二十件

二二

平塚英吉
佐々木林治郎
松井元興
篠田統
近藤金助
山崎直樹
堀場信吉
李泰圭

本院調査事業報告

昭和五年度

一、帝室制度史研究報告
一、日蘭關係交通史料謄寫事業報告
一、北畠親房及び其の子孫の事蹟調査報告
一、和算圖書目錄調製報告
一、インドネシヤ慣習法辭典編纂事業報告

昭和五年帝室制度史研究報告

擔當會員　三上參次

本年に於ける帝室制度史の研究は前年に引續き資料の蒐集と稿本の編成とに從事せり。即ち研究調査を終へ、例會の協議會に報告せるものは第一皇位編中皇嗣篇に於ては皇嗣冊立の方法に就いて、立太子の年齡皇太子の廢替、皇嗣の特典及待遇に就いて、東宮職員に就いて、同太上天皇篇に於ては太上天皇の御在所に就いて、太上天皇の布衣始に就いて、太上天皇の御幸始に就いて等とし、第二大權

編中祭祀篇中に於いては祭祀總說に就いて、陵墓の祭祀に就いて、第四后妃編中皇后篇に於ては皇后冊立の儀に就いて、後宮篇に於ては女御の制度に就いて等とす。次に支那に於ける事項は即位に就いて調査せり。而して第一皇位編中神器篇、帝號篇、皇嗣篇は編纂を終り、同皇位繼承篇中の過半及第四后妃編中の後宮篇の妃、夫人、嬪、女御の諸項は調査を終へ引續き第一皇位編中の國體、太上天皇の二篇、第二大權篇中の詔勅、御璽、祭祀、統治の四篇、第三攝政編等に就いては資料の蒐集中なり。

從來協議會開會は一月、八月、九月の三ヶ月を除き九回なりしも、本年より一月に開會し十回となしたり。蒐集したる資料は一〇六七枚なり。

自昭和四年十二月
至同　五年十一月　調査報告表

年月日	事項	報告者
昭和四年十二月九日	太上天皇の御在所に就いて、太上天皇の布衣始に就いて	和田英松
昭和五年一月十日	祭祀總說に就いて	山本信哉
同　同	皇嗣冊立の方法に就いて	芝葛盛
同　二月十日	皇后冊立の儀に就いて	龍肅
同　三月十日	太上天皇の御幸始に就いて	和田英松
同　四月十日	立太子の年齡、皇太子の廢替、東宮職員に就いて	芝葛盛
同　五月十日	陵墓の祭祀に就いて	山本信哉
同　六月十日	御讓位後の諸儀式に就いて	和田英松
同　七月八日	女御の制度に就いて	龍肅
同　十月十日	支那の即位に就いて	諸橋轍次
同　十一月十日	皇嗣の特典及待遇に就いて	芝葛盛

日蘭關係交通史料謄寫事業報告

擔當會員　坪井九馬三

日蘭關係交通史料謄寫の事業は已に平戸時代に一段落をつげて出島時代に入り、前年以來歷代和蘭商館長の日誌の謄寫を繼續しつゝあり。本年三月二十日學士院發甲第五三一號を以て謄寫すべき史料の目錄を添えて公使館を通じて先方文書館の事務主任（バイルスマ氏）に依頼するところありき。日本公使館、和蘭文書館の盡力により本年中到着したる謄寫史料は六便（一月十四日、七月二十五日、八月二十日、八月二十一日、十月三十日、十一月十二日）に分ち、其の內容は前年受け取りたる到着文書の殘り六十三枚を除きてはすべて右に云へる日誌にして、一六四四年（正保元年）より一六七八年（延寶六年）に至る三十五年間五〇九二枚を算する成績をあげ得たり。今假りに、本年の能率を以て推せば日誌の殘り一七五冊の謄寫を完了するには向ふ五年乃至六年の時間を要する見込みなり。一六五二年以後は手寫（ハンドライティング）一方となし、寫字料一枚六十仙なり。會計につきては本年八月八日までの決算報告ありしが、その後の明細書到着の上にて一括報告致すべし。九月十二日送金したる金八百圓（九七六盾）も殘金少かるべしと思はる。

なほ和蘭在留の臺北帝國大學助教授岩生成一氏に「和蘭風說書」に關する調査を依賴せり。

次に謄寫を了へたる史料の整理保存に關しては近く製本し度き希望を以て板澤囑託をして之に從事せしめ、大體の整理を了せり。右謄寫資料を製本閲覽に便するは急務にして、去る九月二十七日には和蘭公使イエー・セー・バブスト氏、英國大使館員シ・アール・ボクサー氏來院その一部の閲覽を請はれたり。

北畠親房及其子孫の事蹟調査報告書

帝國學士院囑託員　伊木壽一

昨年十一月報告申上げました北畠親房及びその子孫の事蹟の研究に關しその後の成績の大要を申上げます。

前年に引續き史料の補充に努めましたが調査の進行に伴れて新たに調査致しましたものゝ外に既に一見致しました史料を更に査閲する必要を生じたもの多く殊に日記類に於て然うでありました、その大體を擧げて見ますれば、

冬平公記　兼宣公記　實隆公記　元長卿記　宣胤卿記　教言卿記　言繼卿記　看聞日記　薩戒記　長興宿禰記　拾芥記　嚴助往年記　多聞院日記　齊藤基恒日記　朔旦冬至部類記　奈良文書　報恩院文書　門跡傳續武家閲談　閲朝要紀　武切證狀　東津輕郡誌　浪岡名所舊蹟考　附上北畠御所討死法名

右は通覽して史料を得たものであります。その他、公豐公記外十八種の記錄及び和歌山縣丹生文書外三十四部、滋賀縣日吉神社文書外二十部、京都府妙顯寺文書外十六部等も全部閲覽致しましたに拘らず殆ど得る所がありませんでしたので結局新たに補ひ得ました所は史料綱文七十七項、史料目錄十七項、閲覽書の書拔摘要及び文書謄寫合せて百十頁計りであります。

右研究に依り從來の研究を多少とも補ひ得た事の一二を擧げて見ることゝ致します。

その一は北畠氏一族の系圖であります、それは尊卑分脈や伊勢國司記略等の系圖に依つて知られて居りますが實隆公記永正二年正月の條に依りますれば河方と云ふ一家があつたことが知られます、この家は國司滿雅の弟親永と云ふ者から出た系統で代々敍位任官もして居ります、そして四代目の宗範が實隆の幹旋に依つて內謁を賜はり且つその系圖を叡覽に供しました之なとは未知の事實であらうかと存じます次には本宗たる國司家と一族との關係であります殊に木造持康以下俊康政宗等が本宗と不和で幕府と親昵の關係にあつた事は既知の事實でありますが實隆公記宣胤卿記其他の記錄類等に依つて更に之を詳かにすることが出來ました畢竟木造氏の幕府に親昵であつたのは幕府に買收せられたので、それは南朝の遺臣の至なるもので兎角幕府に反抗し來つた國司家に對する幕府の對策の爲めであります、されば國司家歸順の後は幕府の木造氏に對する待遇も次第に薄らいて來たことが右の材料で知られるのであります、又幕府關係と同時に從來餘りに注意せられなかつた朝廷公家との關係の研究にも一歩を進めたのであります。即ち多年結んで解けなかつた國司家と木造長野兩氏との和融が永正元年に至つて出來たのは朝廷の御諭に因る所最も大であり、それも御料所栗眞庄（白子）の保護の爲めであつたことなどはその一端であります。

尙ほ最近史料蒐集の爲め三重縣下へ出張致しましたのでその機會に一志郡倭村成願寺、同郡阿坂村淨眼寺、飯南郡松坂町來迎寺、同町長谷川治郎兵衞氏、同郡射和村一乘寺、同村竹川信太郎氏、同村堀江ゆき江氏、多氣郡佐奈村近長谷寺、同郡丹生村智禪寺、同郡相可町大西源一氏、度會郡大湊町役場等に於て關係史料を蒐集し且つ阿坂（白米城）田丸城、戸木城及び具教滅亡の三瀨御所跡等の形勢を視察致しました。

和算圖書目錄調製ニ付報告

和算圖書目錄之事本月ニ於テ一應調製相終候ニ就キ其概要別紙之通報告申上候也

昭和五年十二月　　帝國學士院囑託　岡本則錄

帝國學士院和算史擔當會員

藤澤利喜太郎殿

一、和算圖書全體ヲ十三門ニ分テリ其名稱竝ニ各門採集ノ部數等左ノ如シ

		部數	冊數（點數）
第一門	總記	六三〇	一、〇七六
第二門	別記	二、二五九	二、八八九
第三門	題術	二、七二三	四、七〇二
第四門	雜記	一四六	一七三
第五門	傳記	三一一	三八一
附書簡類			
第六門	規矩、町見、地方	四〇八	六四二
第七門	天文、運氣、曆術、渡海	五八六	一、二九九
第八門	支那數學者	四四	一八〇
第九門	洋算	一〇三	五九〇
第十門	和蘭數學書	一八	二一
第十一門	器械器具	五二	五二
第十二門	肖像竝寫眞	七四	一一二
第十三門	雜書	一三六	二七一
以上（合計）		七、四九〇	一二、三八八

一、但シ各門ノ圖書ハ夫々五十音順ニヨリ順序ヲ定メ而シテ各門トモニ藏貯ノ便宜上ヨリ之ヲ數ヲ數束ニ分チ每束ニ於ケル圖書ニハ其順次番號ヲ附記シテ特ニ其出納ノ敏捷ヲ念トセリ總束數ハ諸門合計大約四百五十束アリ各束ノ冊數多キハ七八十冊乃至百冊ヲ超ユルモノアリ

一、尙ホ最後ニ圖書器具ノ全體ニ對シテ通番號ヲ附スル豫定ナリ

一、各門目錄調製ノ概要

一、從前ノ圖書目錄ニハ數種乃至十數種ノ別書ヲ假リニ併セ括リテ一冊トシ而モ標題ニハ單ニ或ル一題目ノミ注記セルモノ往々有之斯ノ如キハ搜索上ノ不便ハ言ヲ俟タサルヘキヲ思ヒ此ノ如

キ者ハ都テ一書一書ニ分離シテ箇々ニ記上シタリ是レ希クハ資料トシテ用途ニ遺憾ナカラシメント欲シテナリ

一、著編者ノ姓名竝ニ成稿ノ年月又ハ刻版ノ年月等ヲ其書目ノ行下ニ記注シタリ

寫本中書名ヲ逸失セル者ハ調査シテ其名目ヲ復記シ又元來書名ヲ闕ケル者ニハ内容ヲ考察シテ假リニ書名ヲ暫定シテ記注シ本書ノ主旨ヲ彷彿セシムルヲ企圖セリ

一、寫本刊本トモニ往々一書ニシテ屢々書名ヲ改題シタル者アリ殊ニ刊本ニ在テ甚シトス一例ヲ擧クレバ元祿六年刊行ノ算法明粹記ノ如キ其後數年ニシテ改算塵劫記ト改題シテ發行シ其後又數年ニシテ更ニ之ヲ算法圖解大全ト改題シテ發行シ夫レヨリ後モ尙幾回カ改題シテ摺立發行シタリ書名變改ノ情況斯ノ如キヲ以テ書ノ搜索又ハ研究上ニ間マ困惑ヲ感セシムル者アリ由テ斯ノ如ク其改題シタル書名ノ行下ニハ成ル可ク書ノ原名等ヲ記注シタリ

附記

一、東京帝國大學ヨリ借用和算書

	部數	冊數
以上	一、二二二	二、一四〇

一、寄托和算書

	部數	冊數
柳悅多ヨリ寄托	八〇	九四
弘壽熊ヨリ寄托	一九	四六
田原文太郎ヨリ寄托	三〇	三〇
茂木松次郎ヨリ寄托	三	三
佐久間續遺書預リ	五四一	一、二六六
以上		

一、借用中ノ和算書

	部數	冊數
平澤甚吉ヨリ借用	三	三
竹内四郎ヨリ借用	三	五
丹野八百千代ヨリ借用	二	四
佐藤峯太郎ヨリ借用	五	五
關野定太郎ヨリ借用	五	五
瀨戸政次郎ヨリ借用	一七	三〇
土谷溫齋ヨリ借用	二	二
高木權太郎ヨリ借用	七	七
筏井壽夫ヨリ借用	三七	三七
丹治庄之助ヨリ借用	三〇	七四
以上		

右之通ニ候也

インドネジヤ慣習法辭典編纂事業報告

擔當會員　姉崎正治

本年度に於ては、臺灣蕃族慣習研究(八卷)、臺灣蕃族調査報告書(八卷)、臺灣蕃族慣習調査報告書(五卷)、臺灣蕃族志(一卷)より、主として慣習法に關する土語を摘錄し、部族蕃社名等を明かにして、邦譯を附したるカード二千枚を作成したり。尙また、前年度萬國學士院聯合會議よりの要求に應じて、前記諸書の總目次を英譯して、その謄寫一部を五月に開催されたる同會議に參列の桑木會員を經て提出したり。

研究費補助事項

昭和五年度本院學術研究奬勵金、有栖川宮記念奬學資金を下附されたる者並びに同年度東照宮三百年祭記念會へ本院より推薦したる者の昭和六年三月末日迄に提出せる研究調査報告書を第一部第二部關係に別ち各々ＡＢＣ順にて採錄す。

朝鮮及び滿洲に於ける巫俗の研究

研究者　赤松智城　秋葉隆

（推薦者　志賀城大總長）

一　研究旅行

第一回、自四月十六日至同月十七日

京畿道楊州に至り都堂祭（トダンクツ）を見學す。この巫祭は四月十六日楊州舊鎭山の山腹に於て巫女の司祭によつて行はる。當夜は主巫の私宅に一泊し、夜間行はれたる回停祭（ヘジヨンクツ）を見學することを得たり。尙翌日は巫家に行はれたる私祭二種を見て、邑內民家の祭神を調査す。

第二回、自四月二十五日至同月二十九日

平安南道平壤に赴き城隍堂（ソナンダン）、府君堂（ナグンダン）、國師堂（ククスダン）、盲覡祈禱所、龍神堂（ヨンシンダン）、城隍木（ソナンナム）等を調査し、巫女及盲覡を歷訪し、五箇所に於て盛なる巫祭を見學す。歸途黃海道黃州に有名なる男巫を訪問し調査の結果、此の地方に於ける巫覡の中心地（棘城堂）の存することを知り、後日改めて再調査の必要を感ず。

第三回、自五月二十九日至六月二日
忠清南道公州、扶餘、論山地方を調査す。殊に論山一巫女の藏する數種の記錄を發見して南方巫俗研究上の好資料と認め、全部之を採錄飜譯することとなす。
第四回、自九月二十三日至同月二十五日
前回の調査に洩れたる忠清南道牙山方面を見學し著しき結果を見る能はざりしも、年末一見を切望し居たるソルテー（鳥形を棒の先につけて路傍にたつるもの）を數ヶ所に發見して一點採蒐することを得たり。
第五回、自十月四日至同月十三日
江原道金化地方に鈴を腰にまとへる巫女ありと聞き、實地踏査せるも事實不明、殿（チョルレイ）内（巫女の一種）二名を訪問調査して咸鏡道に向ふ。咸鏡南道北青に至り、女巫一名男巫一名を歴訪し、一日巫祭を見學す。咸鏡北道吉州、鏡城、清津、富寧、會寧の各地に於て同地方に盛なる男巫及盲覡を歴訪し、山谷に散在する在家僧（チエガスン）部落を調査して在家僧と巫覡の關係を尋ね、殊に會寧に於ては盲覡三名による終夜の神事を見學することを得、彼等の讀誦する經文の文獻二種を獲たり。尚鏡城に於ける季朝巫覡廳の殘存者の藏する巫書二種の存在を知り之が採錄を依囑す。

二　採錄及飜譯

巫女の唱ふる呪文、歌詞等は始んど皆口傳なるを以て、之が採錄のため、嘗て李王家に出入せる一巫女の長男に依囑して、その母につき逐次採錄を進め、現在迄の記錄二百枚に達す。今その主要題目を擧ぐれば次の如し

一、不淨　二、Kamang 請拜　三、Kamang 巫歌　四、山主請拜　五、山王巫歌　六、別山　七、帝釋請拜
八、帝釋巫歌　九、天王　一〇、痘神請拜　一一、萬明請拜　一二、軍雄請拜　一三、軍雄巫歌　一四、大監請拜　一五、大監歌　一六、倡夫歌　一七、後解　一八、成造歌　一九、黄帝頌歌　二〇、鉢里公主

又論山巫女の所藏せる巫書及經文は全部轉錄して一應の飜譯を完了したり、その題目左の如し
天地八陽經、回心曲、往生淨土咒、破地獄眞言、夢授經、高王經、帝王經、求淨土、百殺經

尚會寧盲覡の所有せる經文數種の中、最肝要なるもの二種（天地八陽經及求命經）は原典のまゝ之を入手することを得、他の記錄せられざる經文十數種及鏡城男巫の藏書二種もそれぞれ採錄及轉寫に着手せり。

三　蒐集及撮影

巫覡に關する參考品は從來京城帝國大學民俗參考品室に於てその一部を蒐集し來りたるが尚研究旅行の際、各地のものを加ふることを得たり、因に是迄參考品室に於て蒐集せる巫俗關係のものは神像、巫衣、巫帽、巫刀、巫槍、巫扇、巫鏡、巫鼓、占錢、占筒、算木、その他約四十點に達す。巫覡、巫具、巫堂、神木、巫祭の光景等は各地に於て苟も機會ある毎に之を撮影し加ふるに本年九月廿八日京城郊外鷺梁津に於て主要なる巫祭を行はしめて之を活動寫眞に收めたり。

他に附錄として朝鮮巫俗寫眞參拾葉添付せり。

近畿に於ける歴朝宮阯の研究

研究者　肥後和男
濱田耕作
（推薦者　新村會員）

一　紫香樂宮阯は滋賀縣甲賀郡雲井村大字黄瀬字拜志（ハシシ）にあり。土俗内裏野と稱するものこれなり。
二　昭和五年一月これが發掘調査を行ひ多數礎石を發見し遺跡の結構を明にし得たり。
三　遺跡は全く奈良朝風寺院のプランを有し中門、廻廊、金堂、講堂、經樓、鐘樓、僧房、食堂、塔等の遺阯歴然たるものあり。

四　これ紫香樂宮を廢したる後改造して寺院と爲したる結果爲らむ。或は紫香樂宮即甲賀寺爲りし爲とも解すべし。そのいづれが正しきか今俄に決し難し。

他に附錄として「大津京阯の研究」並に紫香樂宮阯寫眞二十二葉地圖一葉を添付せり。

支那文字の研究

研究者　飯島忠夫
（推薦者　白鳥會員）

本年度に於ける「支那文字の研究」は先づ其の第一篇として、支那古來の文字學者が文字製作の原則とする所の所謂「六書」に關する研究を行ひ、第一章に於て、支那文字の創造者として傳へらるる倉頡を論じ、其の傳說は戰國時代の末葉に始めて現はれ、前漢時代に至りて著しく發展し、其の時代の末に出でたる緯書の記述に於て更に神祕的性質を加味し、後漢時代に及び、終に上古の五帝の一なる黃帝の史官と稱せらるに至りたることを明にし、倉頡なる人物は何等正確なる歷史的根據を有せざるものにして、畢竟神話的性質のものなるべきを述べ、併せて伏羲氏の傳へらるる易の八卦を以て文字の起原とするは倉頡傳說の成立以後に於て更に發生したる說なるを明にし、易の八卦と文字とは同一視すべからざると論じて、其の說の妄なる所以を說明し、且つ易の製作年代に論及して、其の製作が文字の創造に後れたるべきを說きたり。

第二章に於ては「六書」を論じ、其の研究の起りたるは前漢時代の中期なる宣帝の時に在ることを說き、其の此の如き必要を生じたるは、言語と書體との變遷により古代の文字が漸く難讀のものとなるに至りしことと、之に伴つて、當代俗用の文字を妄に分析して想像的解釋を下す所の弊風を生ずるに至りしことに由るを論じ、宣帝の時より前漢の末に及ぶまで約六十年間に、張敞、杜鄴、爰禮、秦近、揚雄、劉歆、杜林等の多くの學者が古字の研究に携はり、其の間に於て古文の經典の學勃興して、漢初以來俗用文字即ち隸書にて記したる所謂今文の經典を守るところの學者の說に對抗し、古字の研究は古文經典の研究と相待つて學界に重要なる地歩を占むるに至りたることを說き、古文經典の一なる周禮の中に保氏の官が公卿大夫の子弟に「六書」を敎ふるの記事あるに本づきて、古文の學者は、此の「六書」を以て文字製作の六種の法則と解し、劉歆は之に象形、象事、象意、象聲、轉注、假借の六則を當て、其の學統を承けたる後漢の許愼は少しく之を改めて、指事、象形、形聲、會意、轉注、假借とし、始めて其の著したる說文解字の自序の中に此の六則に對する說明を與へたることを述べ、更に周禮の著作せられたる時代に論及して、其の前漢の中期以後に在るべきを疑ひ、若し果して然りとせば、保氏の「六書」は宣帝以後の文字學者が古字を說明するが爲に立てたる文字製作の六種の原則を其儘に採用したるものと言ふを得べきを論じたり。

第三章に於ては說文解字の自序にある「六書」の說は前漢中期以來の文字學者の說の系統に屬するものなるを以て、先づ其の眞意義を明にせんが爲に、說文解字の本文中に於て「六書」の解釋に關係ある敍述を蒐集し、之を根據として其の解釋を行ひたり。此の說文解字の自序にある「六書」の說につきての解釋は古來紛々たる諸說ありて、甲論乙駁統一する所なき難問題に屬す。特に轉注の一則に對して最も甚しきものあり。其等の諸說の多くは、許愼の眞意を明にせんとするよりも寧ろ各自其の見る所によりて直に周禮の「六書」を說かんとするものにして、異論の生ずるは概ね此の如き態度に原因するに似たり。余が說文の本文中に例證を求めて「六書」を說かんとするは、先づ公平に許愼の說の眞意を明にすることが、進んで支那文字の組織を研究するが爲の第一着手として最も必要なるべきを認めたるによれり。此の研究の結果として、轉注に對しては、淸の江聲が、說文の五百四十部に分屬する文字を各其の部首の文字の轉注としたるところの解釋が、最も正鵠を得たるを明にすることを得たり。更に進んで「六書」は文字製作の原則として製作の最初に標示せられたるものにあらずして、文字學者が文字の構造と其の運用

とを解說するが爲に後に設けたる原則に外ならざるべきを論じたり。

第四章に於ては、「六書」に關する古來の諸說は、其の妥當なると否とに論なく、支那文字の組織を明にするが爲に各何等かの貢獻を爲せるものなるを以て、其れ等に就きて歷史的研究を行ひ、且つ一々批判を加へたり。（第四章は未だ稿せず）。

宗法の研究特に其の實狀の調査

研究者　加藤常賢（推薦者　服部會員）

昭和五年四月より二ヶ年の見込を以て研究費補助を請求し許可せられ、爾來北平に滯在し時勢の激變に伴ひ、漸次破壞せられんとする支那家族制度の文獻的及實際的調査に從事しつゝあり。昭和五年度に於ては主として親族間に於て使用せらるゝ親族稱謂の調査、家族制度の歷史的變遷を溯源的に考究する資料として文字學的研究を爲し、此等に關する文獻の蒐集及調査を行ひ、民國大學卒業生一名を助手とし、大小家族の型態、家族相互の權利義務財產關係等の實際に就き調査を行ひたり。

マハーバストの研究

研究者　木村泰賢　平等通昭（推薦者　姉崎會員）

研究報告として木村泰賢、平等通昭共著、「梵文佛傳文學の研究」（昭和五年十二月岩波書店發行、七九九頁）の提出あり。

平安朝時代の日記の研究

研究者　松本愛重（推薦者　服部國學院大學長）

研究報告　未提出

支那古代銅器及び其の銘文の研究

研究者　會員　內藤虎次郎（申出者　本人）

本研究に關しては、已に本年度に於て壹千圓の研究費補助を受けたるを以て先づ出土の金文を分ちて王國維が國朝金文著錄表に已載せるものと未載のものとの二種とし、而して已載の金文は幸に六百六十餘通の眞拓本を編纂せる者を購ひ得たり。其價格は比較的廉なりしも猶八百圓を要せるを以て先づ其中五百圓を支拂ひたり。未載のものに就きては特に人を旅順在住の羅振玉氏の許に遣はし、同氏が王氏著錄以後蒐集せる金文の三分一を借り出し目下寫眞中なり。因りて次年度に於ては、先づ購得金文の殘額を支拂ひ、羅氏所藏の金文殘部を借り出して寫眞し、更に其餘力を以て錢布、古璽若印譜の收藏家に就き、拓本、印影又は寫眞を蒐集し以て研究資料を整備せんとす。又支那及び我邦に於ける從來の金文研究は印譜の外多く眞拓本に據らずして、影摹本若くは木版石版等の刻本に據れるを以て往々點畫の訛謬を來せる者あり。因りて先づ豫備研究として正確なる拓本印影によりて從來の訛謬を一掃するを期せり。古器の形狀文樣等は已に寫眞若くは印刷物によりて世に出でしもの、外更に收藏家に就きて寫眞拓本を蒐集せんとす。

中世に於ける皇室御領

研究者　中村直勝（推薦者　新村會員）

研究報告　未提出

學習動作の實驗的形式的研究殊に秩序化過程と其の型式

研究報告　未提出

研究者　小野島右左雄（推薦者　松本（亦）會員）

日本兒童の宗教意識の研究

研究者　關　寛之（推薦者　姉崎會員）

第一群　一　内外參考文獻の蒐集及關係内容の渉獵

第二群　一　選定兒童群に就て生活を共にしての研究（第一回は昭和四年度に完結昭和五年度は第二回に當る）

一　臨地調査（昭和四年度に引續いての研究）

調査内容―〔一〕兒童自體に就ての直接調査及研究―〔二〕臨地觀察―〔三〕關係資料蒐集―〔四〕民俗及規制條件

調査地區―〔一〕東北地方（福島、山形、青森、岩手、宮城）―〔二〕本州中部地方（東京府、埼玉、栃木、長野、岐阜）―〔三〕北陸地方（富山、福井）―〔四〕近畿地方（大阪府、三重）―〔五〕山陽地方（岡山、山口）―〔六〕九州地方（長崎、鹿兒島、熊本）

第三群　一　異常兒に就ての研究（不良少年に就て一部分を完了せり）

本報告は前年度と聯絡す

他に「基本選定兒童群に於ける宗教意識の基礎的研究」（兒童研究所紀要第十三卷別刷）を添付せり。

近江商人の研究

研究者　菅野和太郎（推薦者　田島會員）

一　資料蒐集のための出張

A　昭和五年四月　東京市

B　同　年六月　新潟市、秋田市、函館市、小樽市、札幌市、根室町

C　同　年八月　大分市、長崎市、福岡市、山口市

D　同　年十月　東京市

E　滋賀縣下　大津市（六回）　八幡市（三回）　長濱町（二回）　五箇莊村（二回）

二　研究發表

昭和五年二月　大阪の商業と近江商人（大大阪）

同　年六月　商人の漁業家化―北海道の開發と近江商人―（經濟論叢）

同　年七月　長濱縮緬（經濟往來）

同　年七月　徳川時代の匿名組合
—近江商人の企業組織に關する一考察—　（經濟史研究）

同　年十月　徳川時代の工業と商業資本
—日野商人の醸造業經營—　（經濟論叢）

同　年八月　日本商業史（此の書中に近江商人に關する記述を多く收載して居る。）

三　採訪したる資料の多くは謄寫させて居るが、尙謄寫すべき資料は多く殘存して居り、又は未だ全然社會に紹介されて居ない資料も相當あるので今後順次研究發表する考である。

他に前揭「徳川時代の匿名組合」竝に「徳川時代の工業と商業資本」を添付せり。

老子の校正

研究者　竹中信（申出者本人）

參考調査書目

易林漢焦贛著四卷　易傳漢京房著二卷　易傳北魏關朗著一卷　易略例魏王弼著一卷　三墳書晉阮咸注一卷　汲冢周書晉孔晁注十卷　詩傳衞端木賜著一卷　詩說漢申培著一卷　韓詩外傳漢韓嬰著十卷　詩草木蟲魚疏吳陸璣著二卷　大戴禮記漢戴德著十三卷　春秋繁露漢董仲舒著十七卷　白虎通漢班固著一卷　獨斷漢蔡邕著　忠經漢馬融著一卷　考傳晉陶潛撰一卷　小爾雅漢孔鮒著一卷　方言漢揚雄紀十三卷　博雅魏張揖著十卷　釋名漢劉熙著四卷　漢魏石經攷劉椒雲著三卷　戴氏注論語戴氏注二十卷　論語集解義疏何晏集解皇侃義疏十卷　四書改錯毛奇齡撰二十二卷　論語正義劉寶楠撰二十四卷　孟子正義焦循撰三十卷　大學古本說李光地著無卷數　中庸章段李光地著無卷數　中庸餘論李光地著無卷數　論語札記朱亦棟撰三卷　孟子札記朱亦棟撰二卷　增補四書經史摘證宋繼祖撰四卷　一切經音義慧琳撰一百卷　續一切經音義希麟集十卷　竹書紀年梁沈約注二卷　穆天子傳晉郭璞注六卷　越絕書漢亡名氏補十五卷　吳越春秋漢趙曄著　西京雜記漢劉歆著六卷　漢武內傳漢班固撰一卷　飛燕外傳漢伶元撰一卷　雜事秘辛漢亡名氏撰一卷　華陽國志晉常璩著一卷　十六國春秋魏崔鴻著十六卷　晉輔錄晉陶潛著一卷　英雄記魏王粲著一卷　高士傳晉皇甫謐著二卷　蓮社高賢傳晉亡名氏撰一卷　神仙傳晉葛洪著十卷　語石葉昌熾著十卷　金石華編菴王昶著一百六十卷　新鐫張狀元遴輯評林秦漢孤白張以誠撰四卷　孔叢子漢孔鮒著二卷　新語漢陸賈著二卷　新書漢賈誼著十卷　新序漢劉向著十卷　說苑漢劉向著二十卷　淮南子漢劉安著二十一卷　鹽鐵論漢桓寬著十二卷　法言漢揚雄著十卷　申鑒漢荀悅著五卷　論衡漢王充著三十卷　潛夫論漢王符著十卷　中論魏徐幹著二卷　中說隋王通著二卷　風俗通漢應劭著十卷　人物志魏劉邵著三卷　新論梁劉勰著十卷　家訓北齊顏之推著一卷　參同契漢魏伯陽著一卷　陰符經漢張良著一卷　風后握奇經漢公孫宏解一卷　素書漢黃石公著一卷　心書漢諸葛亮著一卷　潛邱劄記閻百詩撰六卷　玉海宋王應麟等撰十六卷　宋翔鳳過庭錄宋翔鳳撰十六卷　初學記徐堅等撰三十卷　退菴隨筆梁章鉅編二十卷　藝文類聚唐歐陽詢等撰一百卷　經籍纂詁清阮元譔一百六卷　老子翼明焦竑輯八卷　老學菴筆記宋陸游撰十卷　輟耕錄明陶宗儀撰三十卷　十賀齋養新錄清錢大昕撰二十卷　陔餘叢考清趙翼撰　北堂書鈔唐虞世南撰百六十卷　通雅明方以智撰五十二卷　讀書脞錄清孫志祖撰七卷　足香亭筆談清阮元著四卷　讀書叢錄洪頤煊著二十四卷　讀書雜識勞格著十二卷　閱微草堂筆記觀弈道人撰二十四卷　酉陽雜俎唐段成式撰二十卷　莊子集解王先謙輯八卷莊子集釋郭慶藩輯十卷　莊子王注無卷數　老子古註李翹著二卷　古今注晉崔豹纂二卷　博物志晉張華著十卷　文心雕龍梁劉勰著十卷　詩品梁鐘嶸著三卷　書品梁庾肩吾著一卷　尤射魏繆襲著一卷　拾遺記晉王嘉著十卷　述異記梁任昉著二卷　續齊諧記梁沈約撰一卷　搜神記晉陶潛著十卷　還冤記北齊顏之推撰一卷　神異經漢東方朔著一卷　十洲記漢東方朔著一卷　洞冥記漢郭憲著　枕中書晉葛洪著一卷　佛國記晉釋法顯著一卷　洛陽伽藍記後魏楊衒之著五卷　三輔黃圖漢亡名氏著六卷　水經漢桑欽著　星經漢石申著　荊楚歲時記晉宗懍著一卷

南方草木狀晉嵇含著二卷　竹譜晉戴凱之著　禽經晉張華注一卷　刀劒錄梁陶宏景纂一卷　鼎錄梁虞荔纂一卷　永豐鄉人雜著羅振玉輯九卷　陶淵明文集宋蘇軾寫十卷　漢魏六朝百三名家集張溥編一百八十卷　全上古三代秦漢三國六朝文嚴可均輯七百四十五卷　謝宣城集南齊謝朓著五卷　潘安仁集晉潘岳著六卷　說文解字義證桂馥撰五十卷　小滄浪筆談阮元記四卷　群書校補陸心源市輯四十九卷　國學用書類述支偉成編無卷數　王函山房輯佚書馬國翰著八十卷　韻府羣玉元陰時夫編　元陰中夫注二十卷　鶴林玉露宋羅文經撰十八卷

切支丹部落の社會的研究

研究者　田北耕也
（推薦者　姉崎會員）

「切支丹兒童宗教心の研究」並に「伊王島切支丹の研究」に引續き、本年は西九州切支丹諸部落を往訪概觀し、就中、黑崎・生月の兩地方を詳しく調べた。別稿「黑崎地方の離れ切支丹」は其結果の一部分である。生月では珍らしい事物を澤山見出したが、其一つである納戸神の祭禮が、舊曆正月の始めに行はれるので、其實況を見た上、經めて報告しやうと思つて居る。今は先づ此地方で特に注意を引いた事項に就て略記し、次に其他の往訪切支丹部落を、假に數個に分類して、其概況を述べる事にする。

第一　生月地方の離れ切支丹

生月は平戸島の北にあり、全島一村、面積一方里に滿たぬ小島である。戸數約一千五百、內カトリック信徒と「かっつう」（「裏生り」の意）と稱する特殊階級民、合計百戸足らずを除き、他は全部離れ切支丹である。其「離れ」の間に次の如き諸問題を見出す。

一　宗教的制度及び祭儀が、黑崎地方のものと、著しく違つて居る。即ち、帳方・水方の外に、御番役・御弟子の兩役があり、信徒の團體としては觸の外に、觸を幾つかに區分して、數戸乃至十數戸を一組とした「ごっしゃ」と稱するものがあり、御番役は其頭で、納戸神を預つて居る。「ごっしゃ」は更に、二三戸を一組とする「こんばんや」に分れ、御弟子は自己の「こんばんや」所屬の「お札」を預つて居る。

納戸神の祭禮は、觸によつて毎年又は二三年目に一回、盛大に且可なり公然と行はれる。お札は「お取替」と稱する儀式の用具であり、此儀式の頻度も、毎日曜日、舊曆毎月一日、又は年に數回と云ふ風に、所によつて一樣でない。札は木製で縱橫一寸に七八分位、一組は十五枚より成り、十五玄義に關するものであるが、今は其意味が忘れられて、毎週又は毎月の吉凶を判斷する御籤のやうな性質を帶びて居る。

之等の制度及び納戸神並にお禮に關する祭儀の起原乃至慣習の地方的變化性に就ての考察は興味ある問題である。

二　平戸島との間にある中江島「のサンヴュアン樣」や、本島西海岸、繁茂せる羅竹にかくされて在る「羅竹樣」は、黑崎の枯松神社に似た信仰對象であり、濱に近き「白濱樣」別稱「千人松」も、段々祠の形式を帶びて來る。皆殉教者に關係せる傳說を有し、やはり俗信仰との融合を物語る資料である。

三　祈願の始めには神寄せをするが、其神々は皆殉教者である。又そこに出て來る固有名詞には、本島のもの以外に、「根獅子はづれの松三郎」、「長崎浦上市五郎」、「肥後のアンジョウ」、「長野のサントゥ」、「安滿嶽の奧の院」等があり、他地方との歷史的關係を暗示してゐる。又巫女や稻荷下げがする神寄せ、古くは大祓の祝詞を思はしめる神々の連唱が、どうしてカトリック教と結びついたかを考へる事は面白い問題である。

四　平戸島の外海に面せる諸部落、根獅子、獅子、高越、春日、白石、山野、主師、下中野、古江には、カトリック信徒も居るが、大部分「離れ」であつて、皆生月島の高地より指呼する事が出來る。此地理的關係は、此地方

の「離れ」の系統を暗示するものではなからうか。

第二　平戸地方のカトリック

平戸島の外海に面して「離れ」が多い樣に、内海方面にはカトリック信徒が、勢力を張つて居る。即ち島の中央、紐差村には約一里を距て、二教會があり、各々に司祭が一人宛居る外、一種の修道院「女部屋」があつて、數十人の獨身婦人が農業・牧畜・宗教々育等に從事し、又看護婦・助産婦を養成して、司祭を補助し、村民に奉仕して居る。信徒は全村の約半數を占めてゐる。隣村中野には信徒は少いが、平戸町舊城下に數十戸あり、目下鐵筋コンクリートの會堂新築中である。

之等と系統を異にして、平戸島の北端神崎舊藩主の馬西放牧場たりし不毛の地に、近時五島地方より移住せる信徒百餘戸、孜々として痩地を耕作して居る者がある。神道を自稱する「離れ」が數戸ある外、一切外教者を混へない。先住民と融和せず、無知・頑迷なりとの惡評が高い。將來如何に發展して行くかゞ問題である。

神崎と並んで縣當局及び地方民の間に評判の惡いのは、平戸島の南、海を經てた黑島である。一島一村、全戸數三百の内二百五十戸が信徒で、會堂は南田平と並んで、浦上天主堂に次ぐと稱せらるゝ宏大なもの、紐差に於ると同樣の女部屋もあり、信仰には熱心であるが、公民としての義務には冷淡で、兒童の學業成績は著しく劣つてゐる。主として黑崎地方から、二百年近く前に移住して來た事は、伊王島の大明寺と似て居るが、維新後は代々フランス人司祭を戴いて居り、三年前殆めて日本人司祭を得た點に於て、伊王島と異る。伊王島と較べて、世評が兩極端に在る事は、注目に値する。近時人口島に溢れ、南田平、大村の諸地方に移住する者が多い。

第三　長崎地方

長崎市内には教會五、司祭八、信徒一萬數千が數へられる。郡部に於るよりも各種の條件が入組んで居り、且移動性が多く、調査が困難である。浦上には兒童の約八割が、信徒である所の小學校があり、適當な方法を發見しさへすれば、現代の學校教育と、カトリックの宗教教育との效果の比較も出來る。市内家野町西畑部落は三十數戸まとまつた「離れ」であり、戸數は少いが、文化の中心に近い爲に、郡部のものとは信仰の動き方を異にするかも知れないから、大切な材料である。

長崎港外には神島、蔭尾島、伊王島の各々に天主堂があり、一人宛司祭が駐り、右長崎市内の司祭と共に、ゼンチョ谷、大山、高島及び木鉢を含めた四千數百の信徒を牧して居る。以上に西浦上村の木場と、「黑崎地方の離れ切支丹」で述べた、諸部落を加へると、西彼杵郡の切支丹が網羅された事になる。

第四　天草地方

熊本縣天草郡大江村及び富津村には、多數の信徒と「離れ」が居る。兩村各々天主堂と司祭とを持つて居るが、三年前迄は一人のフランス人が三十何年間續いて、兩方の教會を兼牧して居た。司祭の個人的影響を見るに適した場所である。海荒く交通不便なる事、生月以上であり、信徒、「離れ」、外教者の三が混在し、よく融和して居る事、黑崎村に似て居る。

第五　太刀洗地方

福岡縣三井郡太刀洗村大字今村に、立派な天主堂があつて、近隣二百數十戸の信徒が、專屬司祭の下に在る。今村部落は全部信徒で、其約半數が平田姓であり、地續きの上高橋にも、少數の平田姓があるが、之は離れでなかつたと云はれて居る。此地方には次のやうな特徴があり、他の地方と夫々比較研究の好資料である。

(イ) 筑後川の流域で地味肥沃なる事。

(ロ) 然し近代文化が農業に機械力をとり入れしめた結果人手が餘るので、以前は北米、今はブラヅルへの移民が流行する事。

(ハ) 其移民の端を開いたのは今村の信徒である事。

（ニ）外教者は信徒を怠惰・奢侈なりと批評し信徒自らも亦長崎地方人の信仰には及び難しと自認せる事。
（ホ）一昨年秋迄約三十年間續いて、一人の日本人司祭を戴いて居た事。

第六　新移住地

長崎縣北松浦郡及び之に續く東彼杵郡の西海岸地方には五島及黑島よりの移住民が、各所に散在し、南田平、小佐々、竹松の三村及び佐世保市には、夫々天主堂及び司祭が居る。何れの地方も、先住の人々と融合せず、切支丹なるが故に擯斥されて居る。小學校兒童の出席並に學業、共に劣ると云はれる所が多い。

以上の諸地方に五島、平戸の北の度島（たくしな）、佐賀縣の馬渡島（まだらじま）を加へると、西九州の切支丹部落は盡される筈である。

別に「黑崎地方の離れ切支丹」の提出あり。

摩尼教特に支那に於ける摩尼教の研究

研究者　矢吹慶輝
（推薦者　姉崎會員）

別記要目

第一　史實と教義との調査
第二　未傳教籍の本文研究

別記

第一　史實と教義との調査

一　支那に於ける摩尼教傳道史

延載元年（六九四）の公傳より開元、天寶、大歷、貞元、元和の各代を通じて（唐會要、舊新唐書、通鑑、佛祖統記、僧史略等）廣く支那本土に傳播し、會昌（五年八四五）の迫害によりて教勢一時衰へしが、五代を經て（五代史）遙に宋代（第十三世紀迄）に及べる（宋史、佛祖統記等）前後五百餘年の傳道史

二　西域に於ける摩尼教の遺蹟及遺物（回鶻人を中心として）

高昌（吐魯蕃）に於ける摩尼寺の遺蹟發見に前後してペルシヤ語、土耳古語、回紇語、漢語の同教文獻の發見あり（その一部は既に獨佛より研究報告を公表せり）、是等の遺物文獻は主として摩尼教徒自身の殘せし重要資料にして異教徒が摩尼教攻擊のためにせる餘他の殘存資料とその選を異にし特に同教の支那傳來に關し又同教の世界傳道に關し（紀元第三四世紀時代の世界三大宗教（カトリック、新プラトン、摩尼の三教）の隨一（ハルナック）たる摩尼教の東西傳道）貴重の研究資料たり、今それ等を綜合しての調査

三　摩尼教と祆教（蘇魯支教）との關係

諸宗教の混成を實行せる摩尼教は所在に諸宗教を混合せしが、就中、發生地の關係上ゾロアスター教と親緣あり、從つて支那に在りてはこの兩教の區別判然せず、或は末尼火祆と稱し或は火祆教と呼ばれ又或は二宗經と云はれ（僧史略、佛祖統記等）しが、史上に顯著なる痕迹を遺せるは寧ろ摩尼教とす

四　摩尼教と道教との關係

燉煌出土化胡經は普通の儒、佛、道「三教混齊」の思想の外に儒、佛、摩尼、道の四教混成の思想に成り、中に摩尼教の記事あり（老子が蘇隣國に入りて摩尼となりし說話）、元と化胡經は晉の王浮（王符）の僞作として此時既に摩尼教が支那に傳へられしか否かを中心として、化胡經（斷片的に引用せられし支那在來の典籍中の化胡經文との比較）と摩尼教の支那初傳と摩尼教對道教の關係教義（道教が摩尼教を包攝せんとせしが摩尼教は道教に混化の形迹なし）研究

五　摩尼教と佛教との關係

漢語の摩尼教籍（敦煌出土本としての摩尼教殘卷（ペリオ氏の研究）、下部讃、摩尼光佛教法儀略）には盧舎那佛、大雄、正法、無明、佛性、法身、三毒、正覺、輪廻、涅槃、淨土、布施等盛んに佛教語を使用せり、摩尼教は初め佛教に假托し後佛教を貶し（宋代には明尊が踞座せる下に佛が洗足の圖を畫き佛教の禪は假禪にして摩尼教のそれが眞禪となせるが如き）始終佛教と交渉せり、それ等彼此交渉の顚末等

第二　教藉本文研究

一　摩尼教禮讃集竝に懺悔文集たる下部讃の研究

数多の禮懺悔文中その根幹をなす讃夷數文第一疊第二疊とそれに關聯せる普敬讃文以下の隨文通解（下部讃の前半）摩尼教にての夷數 Jesus は佛教の本迹二門の如く (1)教祖摩尼と (2)本體的存在(Logos の如く)とを標示し、基督教の夷數は (3)全然惡魔の化身と見做せり、この中、摩尼教の夷數に關する研究は摩尼教と基督教との交渉を示し、夙に東方に景教以外、摩尼教徒が間接に基督教の存在を報告せり、それ等に關する調査を含む

二　摩尼教規たる摩尼光佛教法儀略の研究

大體の注釋を組へ目下判明せざる術語類の調査中

纖維素凝固態の構造

研究者　厚木勝基

（推薦者　小野塚東大總長）

研究報告として「纖維素凝固態の構造（第三報）纖維素凝固態の蒸氣吸收」なる長論文の提出あり

生物體組織の超顯微鏡的構造の研究

研究者　舟岡省五

（推薦者　新城京大總長）

研究報告として Arbeiten aus der dritten Abteilung des Anatomischen Institutes der Kaiserlichen Universität, Kyoto. Serie C. Heft 1.（京都帝國大學解剖學第三講座論文集第三部第一册）の提出あり。

あさがほの諸器官に於ける色素生成の遺傳的研究

研究者　萩原時雄

（申出者　本人）

一　數種の自己花相互の交配實驗の結果、花冠の色素生成には互に補足的關係ある三遺傳因子 C^{α}・C・R が關與する外、R 因子に對する開發因子として、A 或は A^2 があることを明にし得たり。即ち花色の生成に關して爾來その例を見ざる四聯立因子の存在を豫想す。

一　各色彩の有色花間の交配實驗に基き以上各因子の存在により色彩を現す B・P・D^{γ}・$D^{2\gamma}$ 各因子の存否によるアントチヤンに基く多くの色彩即ち、藍色、紫色、紅色等の明色色彩列竝にそれ等に相應する鼠色、葡萄鼠色茶色等の暗色色彩列を生することを明にし得たり。

一　C^{α}・C・R・A 因子に關する多くの劣性白色花の外、R に對する抑制因子の存在による多くの優性白色花を明にす。

一　生理化學的實驗により C^{α}・C 因子はクロモーゲンに關し、R・A^1・A^2 は酵素物質に係るものと認む、C^{α} の關する物質は一つのフラヴォンで構造上側ベンセン核に水酸基を有せざるものなるべく、C^{α}・C 竝に他の一因子

により、他の二種のフラボオン存するものならんと推定す。

一　莖の色素の生成には前記 C^{α}・R 竝に A^1 或は A^2 の存在を要す。

一　種子の色素はフロバフェーンデ、その生成には前記 C^{α} 因子とオキシダーゼに關する、O 因子、パーオキシダーゼに關する O 因子の存在を要し、C^{α}・O 兩因子の間には完全カップリングを保有し、O 因子なき時は茶種子、C^{α} 因子なき時には白種子なることを遺傳實驗竝に、各位皮組織の檢鏡竝に該組織内に於ける酸化酵素の分布の檢定により明にし得たり。尙フロバハアーン色素のクロモーゲンは各色種皮に存するを見たり。

單一筋纖維の收縮及其のクロナキシーに關する研究

研究者　橋田邦彦（推薦者　小金井會員）

教室研究生若林、和合兩博士の補助により單一筋纖維のクロナキシーを測定せるに所要の電氣量（計算的）は通電時間と精密に直線的關係にあることを知りたり。多數の學者の唱道せる理論的見解と一致せず。恐く刺激電流の時間的經過の想定に缺陷あるためならんと信ずるを以て傍ら核質傳道模型に就きて豫想的研究をなしつゝあり。

稻の病理學的研究

研究者　逸見武雄
外研究員（推薦者　新城京大總長）

研究者等が昨年十二月末日迄に邦文又は外國文にて公表したる論文二十數種の別刷は既に一昨年及昨年度報告書と共に提出せり。本年度は印刷に附したる論文數極めて僅少なるも、目下原稿整理中なるを以て近々發表せらるゝもの多數なり。昨年度提出後印刷せられたるものは次の六種なり。（別刷添付）。

一　鈴木橋雄著「種子中に潛在する稻熱疾菌及胡麻葉枯病菌に基く第一次發病の可能性に關する實驗的研究」（主として帝國學士院の補助金にて研究せしめたるもの）（日本植物病理會告第二卷第三號別刷）

二　安部卓爾著「一環境要素として培養溫度を考慮せる場合に於ける稻熱病菌の發育に及ぼす硫酸銅の影響に就て」（主として農林省委託研究に係るもの）（日本植物病理學會第二卷第三號別刷）

三　松浦勇著「稻胡麻葉枯病菌に於ける突然變異的現象に就きて」（主として教室一般實驗費によりて研究せしめたるもの）（鳥取農學會報第二卷第一號別刷）

四　逸見武雄講演要旨「稻熱病の發生と土壤濕度との關係に就きて」（農學研究第十四卷二四八—二五一頁別刷）

五　遠藤茂講演要旨「稻紋枯病の發生に及ぼす溫度の影響に就きて」（日本植物病理會報第二卷第四號別刷）

六　安部卓爾講演要旨「稻熱病菌の寄主體侵入と溫度竝に時間の關係」（日本植物病理學會報第二卷第三號別刷）

次に實驗を略々完了し論文として近々印刷に附せらるゝもの次の如し。

一　佐藤靜一著「植物病原菌類の纖維素分解に就きて（獨逸文）」主として帝國學士院の補助金によりて行はしめたる研究結果にして、稻熱病菌、稻胡麻葉枯病菌、立枯病菌等を材料とし、尙比較の爲め木材腐朽菌其他を實驗に供し、人工培養基とせる纖維素の分解機構を比較論議せり。

二　佐藤靜一著「稻胡麻葉枯病菌の陳久培養液の他菌の發芽及び發育に及ぼす影響に就きての研究（獨逸文）」主として帝國學士院の補助金によりて行はしめたる研究結果にして稻胡麻葉枯病菌は恐らく代謝產物として培養中に何物かを分泌するものゝ如く、其の培養濾液はクロカビの發芽及び生長を抑制する作用と、逆に促進する作用

との兩作用を示すことを證明せり。而して濾液を遠心分離器にて處理すると抑制作用現はれ、濾液をシャンバーラン氏細菌濾過管Fを通過せしむると抑制作用尖はれて促進作用を示すに至る。而して培養初期即ち菌絲の盛に生長する時には促進作用强く、菌の發育止まり又は自己消化の行はるゝ頃には抑制作用强くなることを證明せり。（前年度報告參照）

三　逸見武雄　鈴木橋雄共著　「稻苗に於ける胡麻葉枯病の發生と土壤濕度との關係に就きて」（和文）
一部分帝國學士院の補助金により一部分は東照宮三百年祭記念會の補助金によりて行ひたる實驗結果なり。研究者等は本實驗的研究により稻苗に於ける胡麻葉枯病の發生は其苗の發育せる土壤の濕度と密接なる關係を有するものにして、乾燥土に於けるよりも感染度大なりとの結論に到達せり。蓑に稻熱病に就き發表せる處と同一傾向なり。

四　平山重勝著　「稻苗の細胞液濃度に及ぼす土壤濕度の影響に就きて」（和文）
一部分帝國學士院の補助金により一部分は東照宮三百年祭記念會の補助金により行はしめたるものなり。稻熱病、胡麻葉枯病等が何れも土壤乾燥せる場合に發病多きことを明かにしたるを以て、其理由に關する考察の一部として研究せしめたる結果なり。

五　平山重勝著　「稻熱病菌々絲の發育に及ぼす培養基の滲透壓の影響に就きて」（和文）
本研究は（四）の論文の續報にして同一目的の下に行はしめたるものなり。

六　逸見武雄　安部卓爾共著　「稻熱病菌の寄主體侵入と溫度竝に時間の關係」（和文）
農林省委託研究の一部として發表するものなり。實驗の要旨は前年度報告に記したるが、本年度の繼續實驗結果を加へ、論文として取纒めなるものなり。（安部の講演要旨參照—日本植物病理學會告第二卷第三號別刷）

七　安部卓爾著　「稻熱病菌の寄主體侵入に對する日光の影響に就きて」（和文）
農林省委託研究の一部分として發表するものなり。著者は實驗結果を綜合し稻熱病菌の寄主體侵入に對し、日光は之を遲延せしむるか又は阻害するの作用を有するものなりと結論せり。而して本結果は發芽及び發芽管の伸長度が日光により阻害せらるゝの事實に基づくことを明かにせり。

八　遠藤茂著　「主要なる稻苗核病菌類の越年能力竝に乾燥に對する抵抗力」
本研究は主として帝國學士院の補助金により行はしめたものにして、稻の苗核病に關する研究第五報として發表す。

九　瀨戸房太郎著　「實驗的に見たる稻馬鹿苗病菌の稻苗生育に對する徒長作用竝に抑制作用に就きて」（獨逸文）
帝國學士院の補助金及び一部分東照宮三百年祭記念會の補助金により行はしめたるものなり。本研究に於ては馬鹿苗病菌の培養濾液は單に稻苗の徒長現象を基因することあるのみならず、其實驗の條件如何によりては却つて抑制作用を示すものなることを明かにせり。

次に實驗略々完了し目下成績取纒め中の業績次の如し。

一　「稻の各種苗核病菌の形態學的研究」（主として遠藤茂實驗）
從來輕視せられたる稻の苗核病は近時各地に於て問題視さるゝに至りたるが、其病原菌には分類學的に屬及び種を異にせるもの多數あること明かなり。研究者等は各病原菌の形態を詳細に比較研究せり。稻の苗核病に關する研究第六報として發表の豫定。

二　「稻の各種苗核病菌類の病原性及び苗核形成に及ぼす培養條件の影響」（主として逸見及遠藤茂實驗）
接種試驗の結果及培養試驗の結果に就き論議せり。稻の苗核病に關する研究第三報として發表の豫定。

三　「稻紋枯病菌の寄主體侵入に對する溫度及び時間の關係」（主として逸見及遠藤茂、池野早苗擔當實驗）
蓑に記したる逸見、安部共著稻熱病菌に就きての實驗と同一目的にて類似の方法により行ひたるものなり。前年

度に於ては繼續的に水分を供給したる場合に就きての實驗結果の大要を報告（遠藤茂講演要旨參照）したるが、本年度に於ては間歇的に乾燥と濕潤とを與ふることの影響に就き反覆實驗せり。稻苗核病に關する研究續報として發表の豫定。

四　「日本產並にフィリッピン產稻紋枯病菌の寄主體侵入並に發病に及ぼす溫度の影響」（主として遠藤茂實驗）

遠藤は曩にフィリッピンに發生せる所謂稻のライゾクトニア病は本邦の紋枯病と同一病害なることを指摘發表したるが、本研究に於ては病理學的の比較實驗を行ひたるものにして、全く前論文を裏書する成績を得たり。稻の紋枯病に關する研究續報として發表の豫定なり。

五　「日本產並にフィリッピン產稻紋枯病菌とライゾクトニア・ソラリー菌との形態、生理並に病理學的比較研究」（主として遠藤茂實驗）

本邦に於ては紋枯病菌を Hypochnus Sasakii 菌ならんとなせり。而して遠藤は兩者を同一菌と見做したるを以て、和蘭より取寄せたるライゾクトニア・ソラニー菌と、夫等との比較研究を行ひたり。稻の菌核病に關する研究續報として發表の豫定。

六　「稻菌核病類の土壤接種の可能性並に土壤濕度との關係」（主として遠藤茂實驗）

曩に稻熱病に就きて發表したる處と（前年度に別刷提出）、同一目的にて行ひたる實驗なり。稻の菌核病に關する研究續報として發表の豫定なり。

七　「赤黴病菌による稻苗立枯病の研究」（主として德田重吉擔當）

前年度報告に成績の大要を記したるが、本年度も繼續實驗せり。本年度には主として發病と土壤溫度との關係を檢討せり。

八　「稻苗立枯病菌（赤黴病菌）の陳久培養液の他菌の發芽及び發育に及ぼす影響に就きての研究」（主として德田重吉實驗）

稻胡麻葉枯病菌に就きての佐藤靜一の研究（近日印刷發表）と同一方法にて行ひたる實驗なれども、本菌に在りては胡麻葉枯稻菌とは多少異る成績に到達せり。

九　稻種子中に潛在する病原微生物に關する研究（主として鈴木橋雄擔當）（日本植物病理學會第二卷第三號別刷）

本研究の一部分は既に發表したる處なるが（論文別刷參照）本年度に在りては、(一)籾種の外觀と內部侵害との關係を陸稻に就きて調査し水稻に就き報告せると同一結果に到達せり。(二)種子組織中より分離したる各種微生物の開花時接種試驗を行ひ前年報告せる稻熱病菌、胡麻葉枯病菌と同樣なる病理性を有する菌多數あることを明にせり。(三)種子中に潛在する病原微生物の生存期間に就き研究せり。種子組織中にて稻熱病菌は二ヶ年、胡麻葉枯病菌は四ヶ年生存することは既に發表したるが、其後の實驗により他菌の生存期間をも明にせり。(四)種子中に潛在する病原性微生物の發育に及ぼす水素イオン濃度の影響を研究し、各菌の發育し得る PH の範圍を明にせり。(五)種子中に潛在する病原性微生物の發育と溫度との關係を研究せり。

一〇　稻熱病菌に於ける生理學的分化現象の研究（主として逸見及小西全太郎擔當）

植物病原菌の生理學的分化現象の研究は現今病理學會の最大論點なり。研究者等は多年に亘り各地より又は各時期に蒐集せる多數の菌系統に就き本問題を研究せり。而して本年度に於ては各系統菌の培養基上に示す諸性質發育に及ぼす溫度の影響、稻苗に對する病原性等を比較せり。成績の大要次の如し。(一)培養基上に示す諸性質の比較研究に於ては、基中菌絲着色度により又氣中菌絲の有無及肥子形成の度によりて、大體菌系を分類し得ることを明にせり。(二)發育に及ぼす溫度の影響に就きては各系統何れも廿八度に於て最も速なる發育をなすも、夫より高溫度又は低溫度又は低溫度の培養に在つては發育の遲速が各系統每に常に特異性を示すことを知れり。即ち廿六度に於て甲群は尙よく發育するも、乙群は既に發育を停止し反つて乙群は低溫（十六度、二十度）に於て

甲群よりも發育可良なり。斯の如くして大體供試系統を四群に分類し得たり。(三)病原性に就きては病原性の常に强大なる系統と弱小なる系統とあるを知れり。

一一　稻胡麻葉枯病菌の寄生體侵入と溫度並に時間の關係（主として逸見及野島友雄擔當）

本研究は曩に逸見、安部の共著として纒めたる稻熱病菌に就きての實驗と同一目的にて略々同一方法により行ひたるものなり。大體の成績は前年度報告に記したるが、本年度に於て完結したるを以て近々發表せんとす。

一二　稻熱病及稻胡麻葉枯病の發生と土壤濕度との關係（主として逸見及鈴木橋雄擔當）

稻熱病及び稻胡麻葉枯病の發生は共に土壤の濕度と密接なる關係あり。土の乾燥と共に其發生多きことは既に前年度末迄に明にしたる處にして一部分は前年度中に論文として發表せり。本年度に於ては、更に稻品種との關係、肥料成分土壤の種類等を考慮せる場合に就きて同一實驗を反覆せり。

一三　水生菌類の種類と稻苗腐敗病との關係（主として逸見、小西、池野擔當）

從來稻苗腐敗病は Achlya Prolifera なる水生菌によるものとせられたるが、研究者等は他の二三水生菌の種類と其稻苗に對する病原性とを研究し、更に夫等の水生菌類の生理學的性質を調査せり。

一四　稻馬鹿苗病の土壤接種、開花期接種等の可能性に關する研究）主として瀬戸房太郎實驗）

各種系統の馬鹿苗病菌を使用し、土壤接種及び開花期接種等を行ひ、其結果を調査し、更に馬鹿苗病菌による徒長作用及抑制作用の關係を檢討せり。

一五　硫酸銅及び硅酸曹達を施用せる土壤に生育せる稻と稻熱病發生との關係（主として農林省委託研究費により安部卓爾、岡村英二實驗）

本研究に於ては硫酸銅及硅酸曹達旅用の場合に就き實驗したるが、葉稻熱、穗首稻熱共に硫酸銅の一定少量を添加せるものに於て然らざるものに比し發病小なり。其理由に就きても檢討中なり。

一六　水耕培養液に微量の硫酸銅、硫酸マガネシウム等を添加せる場合に於ける稻苗の稻熱病に對する感受性の變化（主として安部卓爾、岡村英二、東原好雄が農林省委託研究費により行ひたる實驗）

本實驗によれば根より硫酸銅の微量を吸收せしめたる稻病は明に稻熱病に對する抵抗性を增すものにして、大體に於て硫酸銅濃度の增加と共に發病率減少せり。硫酸マガネシウムに就きては尙報告し得る成績に到達せず。

一七　土壤溫度と肥料分解との關係が葉イモチ病發生に及ぼす影響（主として安部卓爾が農林省委託研究として實驗擔當）

本研究は生紫雲英を施行せる場合に就き行ひたるものにして、多少の成績を得たれども尙繼續中なり。

一八　稻熱病菌の發育に及ぼす硫酸鐵の影響（主として安部卓爾が農林省委託研究の一部分として實驗擔當）

前年度に於て硫酸銅を以てせる實驗を完結し既に論文として發表せり。（別刷參照）本年度にては同一實驗を硫酸鐵を以て行ひたり。目下成績取纒め中なるを以て不日發表す。

一九　低溫度に於ける稻熱病菌の生活力に關する研究（主として安部卓爾が農林省の委託研究の一部分として擔當）

目下繼續中なるが既往の成績に見るに、零下四—五度にては五〇日を經過するも尙二〇%以上發芽力を有する分生胞子あること明かなり。

二〇　稻熱病菌分生胞子形成と溫度との關係（主として農林省委託研究費により安部卓爾實驗）

本研究は分生胞子形成に及ぼす環境の影響の一部として行ひたるものなり。實驗の範圍にては攝氏二八度にて最も旺盛にして、十六度の場合の一六六倍に當り二四度は之に次ぎて八四倍、三二度は二七倍、二〇度は一二倍にして順次之に次ぎ、三十六度にては全く分生胞子形成を見ず。

二一　稻熱病菌の寄生體侵入と空氣濕度との關係（農林省委託研究費により主として安部卓爾擔當）

水耕によりて育成せる稻苗を用ひて研究せり。大體に於て空氣濕度一〇〇%の時に侵入最大にして八十八%迄は

多少の浸入を認めたるも八十一%にては全く浸入し得ざりき。

二二　稻熱病菌の寄生體侵入と稻苗の部位との關係（農林省委託研究費により安部卓爾實驗）

先人研究によりば葉の尖端が最も浸入し易き點なりと。然るに研究者等の實驗によれば全く部位による差を認め得ざりき。

二三　稻熱に病原性を有する四絲狀菌の形態學的、生理學的並に分類學的比較研究（主として帝國學士院補助金より松浦勇擔當實驗）

松浦は爰に本問題に就き一論文を發表したるが、其後主として分類學的考察を完成し、各菌の種名を決定するに至れり。

牛乳の組成に關する研究

研究者　平塚英吉
佐々木林次郎
（推薦者　小野塚東大總長）

第一報

牛乳の脂肪及フォスフアチドに就きて

前回（昭和四年十二月）報告せり

第二報

牛乳のステリンに就きて

乳脂の不鹼化物中にコレステリン以外のステリンの存在するか否かに關しては、未だ文獻なきを以て、余等は此の點を闡明せんと欲し、先づ粉乳をエーテル及酒精にて浸出して脂肪を分離し、之を苛性加里酒精溶液にて冷鹼化を行ひて分離したる不鹼化物に就きてステリンを分別せり。

其結果、牛乳のステリンの大部分がコレステリンにして、エルゴステリンは吸收スペクトルによりて檢出し得る程度に存するに過ぎず、其他のステリンは存在せざることを明かにせり。

實驗の概要は次の如し。

11.5 kg のメーレル・シウル式によりて製造したる全乳粉を先づエーテル及温酒精を以て浸出して脂肪及類脂物質 3.025 kg を得、之を苛性加里酒精溶液を用ひて冷鹼化を行ひ、赤褐色の不鹼化物 12.5 g を分離し、次に之を 95% 酒精溶液より三部分に分別せり。

分別部	融點	收量
A	142–143° C	6.50 g
B	141–142° „	2.52 „
C	殘渣	3.48 „

分別部 A を再び酒精溶液より分別したるに、融點 144–145° C の結晶 5.12 g を得たり。

分別	酒精濃度	收量	融點
結晶 (1)	90%	2.27 g	144–145° C
„ (2)	80%	1.28 „	„
„ (3)	70%	1.57 „	„

之を更に酒精溶液より再結したるものを次ぎにメチルアルコール溶液より再結したるに、融點 147–148° C の結晶 2.95 g（コレステリン A とす）を得たり。この結晶はコレステリンの一般反應を示せども、エルゴステリンの反應を示さず、之に醋酸無水物を加へて加熱すれば融點 114° C のエステルを生じエーテルに溶解し、臭素の氷醋酸溶液を加ふれば臭化物を生じ、又醋酸エステルよりは同樣に臭化物を生ず。上記の如くして得たる臭化物の分析結果は次の如し。

實驗數	0.1025 g 物質（臭化物）0.0712 g Ag Br 29.56% Br.
理論數	Cholesterylbromide (C 27 H 46 O Br 2)
實驗數	0.1005 g 物質（醋酸ヒストテル臭化物）0.0634 g Ag Br 0.2698 g Br 26.85% Br.
理論數	Bromocholesterylacetate (C 29 H 48 Br 2 O 2)

故に、ここに分離したる結晶はコレステリンにして、其中にエルゴステリンの存在することは其化學的性質によりて之を檢出することを得ず、然るにこのコレステリンの吸收スペクトルによれば、其中に極少量のエルゴステリンの存在することを明なり。

分別部Bは酒精溶液より再結したるに、144–145° C の結晶 0.75 g を得たり。この結晶に就ては、分別部Aに於けること同樣にコレステリンなることを證明せり。

分別部Cは、分別部A及Bの處理に於てコレステリンを分別したる母液を合し、更に分別したるに次の如し。

分別	酒精濃度	收量	融點
結晶 (1)	90%	2.21 g	137–138° C
結晶 (2)	50 „	1.28 „	135–136° „

結晶(1)及(2)をアセトン溶液より二回再結したるに、融點 147–148°C の結晶 1.33 g（コレステリン B とす）離せり。之につきては上記と同樣にコレステリンなることを證明せり。又その中に微量のエルゴステリンの存在することを吸收スペクトルによりて檢出せり。

コレステリン B の結晶を分ちたる母液よりは融點 134–137° C の結晶 1.26 g（コレステリン C）を分離し、コレステリンの他に微量のエルゴステリンの存在することを吸收スペクトルによりて證明せり。

不鹼化物を分別結晶法によりて分離し、其中にコレステリン以外のステリンの存在せざることを明かにせり。

上記の如く分別結晶法及ヂギトニンによりて結晶性ステリンを完全に分別したる殘滓は黃褐色粘稠性物質にして

ステリンの反應を呈せざれども、ヴィタミン A の反應は顯著なり。即ち、この部分はヴィタミン A に相當する部分なり。

上記に分離したるコレステリンに就ては化學的にエルゴステリンの存在を證明することを得ざるを以て、其吸收スペクトルを觀察するに、明かにエルゴステリン特有の吸收帶の存在することを認めたり、即ちコレステリン A、B 及 C を各々酒精に溶解し、0.286% 溶液となし、室溫に於て 100. 79. 63. 50. 40. 30. 25. 22. 18. 14. 10. 6 及 2 mm の液層に就て觀察したるエルゴステリン特有の五本の吸收帶が 2900. 2800. 2700. 2600. 及 2500 Å の附近に存在することを認めたり。

以上の實驗によりて牛乳のステリンは大部分コレステリンなれども、其中に極少量のエルゴステリンを含有することを明かにせり、而して牛乳及乳脂のステリン含量は次の如し、但し、牛乳は脂肪 3.5% を含むものとす。

成分	乳脂中(%)	牛乳中(%)
コレステリン	0.364	0.013
ヒルヒステリン	微量	微量
ヴィタミン A に相當する不鹼化物	0.050	0.002
	0.414	0.015

外に添附せる論文次の如し。

The Distribution of Phosphorus in Cow's Milk and the Scheme for the Separation of Phosphatides by Riujiro Sasaki. (Reprinted from the Bulletin of the Agricultuarl Chemical Society of Japan. Vol. 6, Nos. 6—9)

小惑星の運動の研究

研究者　會員　平山清次
（申出者　本　人）

本年四月以降攝動の計算による小惑星の推算表を計算せるものは左の二十個にして

七、四四一、七〇一、八〇一、八一四、八一五、八一九、八二五、八四五、八五二、八五七、九〇一、九一四、九二〇、九二三、九四五、九四五、九六六、一〇八八、一〇八九、一〇九〇

此中一〇八八號以下の三個は東京天文臺に於て發見したるものなり。此等の推算表は前年の例により在伯林「アストロノミッセス、レヘンインスチチュート」に送附同所より發行の一九三一年度小惑星表中に登載濟なり。軌道の修正を完了したるものは次の三個にして

五四八、九二四、三九〇

此中九二四號は前に修正したるものを其後の觀測により更に修正せるものなり。此他續行中のもの猶ほ一個あり。修正の結果は昭和六年二月の帝國學士院例會に報告の豫定なり。

軌道の修正は一月中に打切り其後は軌道の統計的研究に從事する豫定なり。

外に本院紀事に採錄せられたる論文左の如し。

K. Hirayama and K. Akiyama: Improved Elements of the Orbits of Asteroids. (Fifth report). (Proc. of the Imperiad Academy, Vol. VII., No. 2. p 40—43)

地震前に起る地盤傾斜

研究者　會員　今村明恒
（申出者　本　人）

昭和五年度に於て本會員に交付せられたる研究補助費を以て新潟縣下並に東京府神奈川縣下に於ける地震前後に發生する地形變動研究中の處、今回其成果を得たるにより、去昭和五年十二月十二日貴院例會の席上に於て講演し、其概要を貴院記事昭和五年十二月號に掲載せられたるにより、右別刷一部提出致し研究成績報告とす。

Akira Imamura: On the Secular Variation of Land-level in the Littoral of Central Etigo. On the Block Movement accompanying and following the Kwantô Earthquake of 1923. (Proc. of the Imperial Academy, VI, 1930, No. 10.)

炭素鋼の組織が其機械的性質に及ぼす影響

研究者　井上克巳
藤田守太郎
（推薦者　松浦九大總長）

一　實驗に供せる材料は二十一種にして其炭素含有量（百分率）左の如し

1.48	1.38	1.34	1.27	1.24	1.22	1.07	1.03	0.97	0.95	0.94	0.86	0.80	0.78	0.70	0.64	0.48	0.44	0.38	0.28	0.09

一　衝擊試驗及硬度測定右の材料を一定温度にて燒鈍し調質せしめたる上熱處理を施し各種組織のものとなし之を試片として既に衝擊試驗及硬度試驗を完了せり。

一　目下 J. G. A. R. Odin 氏の溶解度測定器の改良せるものを用ひて以上の試料に就き酸に對する溶解度を測定中なり。

一　又別に材料の受けたる機械的裝作の差による球狀セメンタイト化の難易を試驗して供試前機械的裝作を受くること大なるもの程夫が容易なるを認めたるを以て進んで其間の關係を明らかにせん事を期せり。

心臓刺戟傳達系の生理に關する研究

研究者　石原　誠
（推薦者　松浦九大總長）

余等は曩に犬心臓の刺戟傳達系に於て、（一）其刺戟傳達速度を直接的に測定し、一秒二乃至三米なる價を得、更に（二）其刺戟傳達系の各部位を摘出し、之に對する一定藥品の作用を檢査し、之に依て此等諸部の性質の異同を推定せり。（既發表）、然れども犬心臓は形小なるを以て、此兩種實驗の施行甚困難なり、依て余等は此困難を避けんが爲に、形大なる牛心臓に就て此實驗を試みんと欲し、先づ其前提として摘出牛心臓を灌流保生し、又其摘出刺戟傳達系を保生する方法を研究し、之に成功せり。（既發表）。依て余等は此牛心臓に就て上述の兩實驗を行はんとせるが幸に本年四月帝國學士院より其研究費支給の恩典を受けたるを以て、爾來孜々として之に從事せり。之は固より未だ完結するに至らざるが、研究進行の大略を記すれば、（一）刺戟傳達速度の測定結果は略上記の犬心臓に於けるに近きが如きも、今日迄の成績は遺憾ながら甚不定なり。之は實驗方法其宜を得ざりし爲にして再三之を改良して今日に至れり。今は此方法に依り研究を進行せんとしつゝあり。　次に（二）刺戟傳達系のみならず竇結節をも摘出し之に對する諸藥品及「イチン」の作用を調査せるが今日迄の成績に於て、特に注意すべき者を擧ぐれば（い）迷走神經毒たる「アセチル、ヒヨリン」及「ピロカルピン」は刺戟傳達系分枝には殆ど全く無效なるが、田原氏結節には特に有效にして、其作用は竇結節に於けるよりも強きこと（ろ）「チヤン」加里は前房筋片の自働的運動を停止せしむるも、刺戟傳達系のみならず亦竇結節部の運動を停止せしめざること（は）其他「カルチウム」或は安息香酸「コフエイン」の作用が竇結節と田原結節とに於て多少異ること等なり。此等の所見は既に心臓の生理に關し新見解を提供するものなれば以上所述の（一）及（二）の實驗は更に繼續擴張する必要あるは余等の確信する所にして又之を熱望する所なり。

昭和二年大地震に伴ふ地殼變動の研究

研究者　石本巳四雄
　　多田文男
　　坪井忠二
（推薦者　寺田、末廣會員）

昭和五年度丹後地方水準點檢測變動圖貳葉提出あり。

日本產植物蟲瘿の研究

研究者門前弘多
（推薦者　鈴木會員）

昭和五年度に於て貴院の補助により岡山、廣島、鳥取、島根、福岡、熊本、鹿兒嶋、宮崎、大分、福井、新潟、福島、岩手、諸縣下に於て採集をなし既錄種未錄種を合して約二百種の標品を得尙各地の斯學關係者に採集を依頼して七名より既錄種未錄種計百六十八種の送附を受けて目下研究繼續中なり。右標品中には既錄種重復種も多きも新種は七、八十種に達する見込にして生成動物を得たるものは之が所屬種名及生態を研究中にて一部分は之を近く專門雜誌に發表の豫定なり。尙或種類につきてはそれぞれの專門學者に種名の固定を依頼中なり。

神經系統の新陳代謝の研究

研究者　加藤元一
　　外三名
（推薦者　林慶大學長）

第一表

温度	神經ノ重量（瓦）（濕）	酸素消費量（毎瓦毎時立方粍）
20°	0.110	44.3
20°	0.110	48.0
20°	0.153	54.1
20°	0.099	79.5
20°	0.100	81.4
13°	0.115	42.4
13°	0.105	42.8
13°	0.105	49.7
13°	0.140	43.5
13°	0.140	49.7

第二表

温度	神經ノ重量（瓦）（濕）	酸素消費量（毎瓦毎時立方粍）	炭酸ガス排泄量（毎瓦毎時立方粍）	呼吸商
20°	0.120	59.2	50.8	0.854
20°	0.120	79.0	60.4	0.765
20°	0.115	82.8	56.8	0.685
20°	0.120	66.2	43.2	0.652
20°	0.115	85.8	58.4	0.680
20°	0.120	62.4	46.1	0.738

第三表

温度	浸漬リンゲル氏液 PH（磷酸緩衝液）	酸素消費量（毎瓦毎時立方粍）	酸素消費減小割合 %
13°	7.3	57.2	—
13°	8.2	19.1	66.6
13°	5.2	29.0	49.3

既に吾等は Warburg 氏の微量呼吸測定器を用ひて、末稍神經の瓦斯代謝を測定せり。即ち蛙の坐骨神經の靜止酸素消費量を測定せる數十例に就きて見るに攝氏二十度に於て一瓦神經が一時間に消費する酸素量が最小四四、三立方粍より最大八五、八立方粍に及びその平均値は六八、〇立方粍なり。又攝氏十三度に於ては平均四五、六立粍なり。第一表は得たる數十例中の二三を示すものなり。

吾等は更に酸素消費量と共に炭酸瓦斯排泄量を測定して之より呼吸商を求めたり。實驗の結果は第二表に示す如く炭酸瓦斯排泄量は常に酸素消費より小にして呼吸商は平均〇、七二九を得たり。以上はリンゲル氏液中に於て酸素飽和の狀態の下に於ける呼吸量なれども神經浸漬液の性質及び酸素分壓が神經の靜止呼吸量に及ぼす影響は目下研究中なり。浸漬液の水素「イオン」濃度が神經の酸素消費量に著明に影響することは第三表によりて明かなり。（詳細なる實驗は目下續行中にして玆には一例を擧ぐるに止む）

驢つて刺戟時に於ける神經の瓦斯代謝は如何。この問題は本研究の核心を爲すものにして吾等は正に研究の歩を此の方面に進めんとするものなり。抑々骨格筋に於ては興奮に伴ひて含水炭素の分解ありて乳酸の生成せらることは遍く知られたる事實なり。同じ興奮系なる神經に於ては如何。吾等は既に坐骨神經を用ひて之を刺戟してその支配する筋肉に短時間强直を生せしめて後神經を化學的に分析してその乳酸量を測定せしが第四表に示す如く刺戟により乳酸重の增加を見ず。

第四表

温度	神經並ビニ種ノ類數	神經重量（瓦）	圖接軸刺戟距離（粍）強度	刺戟距離（粍）強度	刺戟頻數（毎秒）強度	刺戟時間（分）	總乳酸量（瓦）	乳酸量（%）
15° C	刺戟神經	489	540	200	50	70	1.41	0.28
	對稱神經	486					1.40	0.28
11° C	刺戟神經	456	550	240	30	60	1.11	0.24
	對稱神經	455					1.06	0.23
13° C	刺戟神經	475	520	245	50	90	1.67	0.35
	對稱神經	471					1.65	0.35

以上は吾等の今日迄に得たる業績にして更に本研究の計畫を項別に說明すれば次の如し。

一　末稍神經靜止時新陳代謝の研究

A　Warburg の微量呼吸測定器を用ひて、神經の酸素消費量炭酸瓦斯排泄量及呼吸商を測定し更に瓦斯交換の温度係數を求むる時は神經靜止時新陳代謝の樣式を知ることを得べし。

B　筋肉に於ては靜止時含水炭素代謝の行はるゝこと既に知れたり。神經に於ては如何。之がためグリコゲン定量乳酸定量燐酸定量を末梢神經に就きて、化學的に實施せんとす。

二　末梢神經活動時新陳代謝の研究

靜止時代謝の樣式明かとなりて後、神經に刺戟を與へて之れなして機能を營ましめて、機能と代謝との關係を一に掲げたる方法を以て研究せんとす。本研究の中核は實に茲に存するものなり。既に余等の一人は筋肉に於ける刺戟の强度と含炭素代謝との關係を研究して興味ある事實に到達せり。神經に於ては如何。其他神經の興奮恢復の過程の化學的研究も吾等の興味を持つものなり。

三　脊髓及大腦の新陳代謝の研究

前述二項の方法を用ひて腦脊髓を材料とし其靜止時活動時の新陳代謝を研究せんとす。

四　神經系統の熱發生に關する研究

A. V. Hill 氏の方法に從ひて神經の熱を測定することに依りてエネルギー代謝樣式に最後の決定を與ふることを得べし。

以上の研究を總括すれば神經系統に於ける新陳代謝の本態を決定することを得ると信ずるものなり。

アミノ酸の合成

研究者　慶松勝左衞門
（推薦者　小野塚東大總長）

研究報告として「α-Amino-γ-oxy-n-heptylsäure の合成（第二報）」（藥學雜誌第五十卷第七號別冊）の提出あり。

大麥畑に於ける連續灌水の效力に就ての研究

研究者　會員　吉川祐輝
（申出者　本人）

一　昭和五年二月鳥取縣氣高郡鹿野町附近に於ける大麥灌漑の實況も調査し、灌漑水の標品を採取せり。

二　昭和五年二月島根縣安濃郡佐比賣村大字志學に於ける小麥灌漑の實況を調査し、灌漑水の標品を採取せり。

三　昭和五年三月山梨縣南都留郡瑞穗村に於ける大麥灌漑の實況を調査し灌漑水の標品を採取せり。

四　昭和五年四月栃木縣日光町字野口に於ける大麥及野口菜の栽培實況を調査せり、何れも冬期灌漑を行ふものなり。

五　前記（一）（二）及（三）の灌漑水は何れも調査當時、其の地の氣温に比し著しく高温なることを確めたり、其の數字は今略す。

（一）及（二）の水標品は之を農林省農事試驗場に依頼し、（三）の水標品は之を東京農業大學に依頼して肥料的主要成分の含有割合を分析定量したるに何れも若干の窒素、燐酸、加里並に石灰を含有することを確めたり、其の數字は今略す。

六　今後猶ほ前記の如き調査、觀測、及化學分析を擴張且つ反復し研究を完成せんとを期す。

組織體外培養法の研究特に同法を應用したる細菌學及血清學的研究

研究者　木村廉
（推薦者　新城京大總長）

一　組織細胞の形態と機能

脇元秀義、前田松茂「體外培養組織に於け細胞内脂肪物質の研究」（日本微生物學病理學雜誌第二十四卷第一號拔册）

一　各種組織の培養

足立章「體外培養による上皮性眼組織の研究（二）網膜色素上皮細胞の體外培養」（日本眼科會雜誌第三十四卷第九號別刷）

足立章　Einige Bemerkungen über in vitro gezüchtete Epithelien.

一　組織發育と種々なる要約

福光廉平「フイブロプラステンの發育と培養基の水素イオン濃度並に培養溫度との關係」（日本微生物學病理學雜誌第二十四卷第三號拔册）

福光廉平「諸種糖類の培養組織發育に及ぼす影響と水素イオン濃度」（日本微生物學病理學雜誌第二十四卷第六號拔册）

服部鉦三「體外培養組織に及ぼす色素の影響に就て第一、二、三編」（日本微生物學病理學雜誌第二十四卷第一號拔册）

太田喜直「家鶏胎兒エキス、成育家鶏脾臓エキス、並に成育家兎脾臓エキスの體外培養家鶏胎兒心臓組織に對する發育促進作用に就て」（日本微生物學病理學雜誌第二十四卷號三號拔册）

太田喜直「組織體外培養に用ふる無機榮養に就て」

太田喜直「解糖酵素賦活體殊に重炭酸曹達が體外培養組織解糖作用並に發育に及ぼす影響に就て」（日本微生物學病理學雜誌第二十四卷第十一號拔册）

三杉義利　藤澤義雄「組織の發育に及ぼす臓器及び血漿の年齢的關係」前後編（日本微生物學病理學雜誌第二十四卷第五號同第六號拔册）

平井禎三「砒素の家兎脾臓組織發育に及ぼす影響」（日本微生物病理學雜誌第二十四卷第九號拔册）

足立章　Über den Einfluss fluoreszierender Stoffe auf das Wachstum der Fibroblasten in vitro.

佐藤支定　Der Einfluss von synthetisch dargestelltem Thyroxin auf das Wachstum von gezüchtetem Gewebe.

一　培養組織の生體染色

服部鉦三「組織體外培養法による生體染色の研究」第一、二、三編（日本微生學病理學雜誌第二十四卷第十一號拔册）

木村廉、服部鉦三　Sutudien über Bluthistiozyten in der Gewebezüchtung.

一　細菌學及免疫學的研究

福光廉平「體外培養に於けるチトトキーンの研究」第一、二編（日本微生物學病理學雜誌二十四卷第三號拔册）

木村廉、石井辰次　Wirkungen der Bakterien und Schlangengifte auf gezüchtete in vitro.

同　人　Gewöhnung der Fibroblasten an Bakterien und Schlangengifte.

佐藤友定「體外培養組織の抗體產生に關する研究」（日本微生物學病理學雜誌第十四卷第三號拔册）

藤澤義雄「痘毒の研究」第一、二編（日本微生物學病理學雜誌第二十四卷第二號拔册）

藤澤義雄「痘毒滅殺素の體外產生に關する研究」（日本微生物學病理學雜誌第二十四卷第十號拔册）

小松周治「組織體外培養法に依る殺菌素產生に關する研究」（日本微生物學病理學雜誌第二十四卷第十一號拔册）

及豆中に含有さるゝ新鹽基性化合物の化學構造の研究

研究者　北川松之助
（推薦者　松浦九大總長）

及豆アミノ酸（カナバニンと命名）は先報告の如く肝臓酵素（カナバナーゼと命名）によりて分解されれば其後引續き同酵素による分解生成物を吟味し尿素の他更に一新アミノ酸（カナバリツク酸と命名）を得ビクレートとして精製し其銅鹽を製りて元素分析を行ひ他方カナバニンと共にカナバリツク酸の種々誘導體、酸化還元生物の吟味を行ひ目下其構造を引續き研究中なり。

骨質並に齒牙の生體染色に於ける實驗的研究

研究者　清野謙次
外　一名
（推薦者　新城京大總長）

研究報告　未提出

酸性白土の理論化學的研究

研究者　小林久平
山本研一
（推薦者　高松會員）

酸性白土の主要なる用途は石油工業に於ける各種分溜油の脫色精製にあり予等は前回に引續き今回酵性白土類の諸種石油類に對する脫色度に就て實驗し之を工業化學雜誌「昭和五年十一月酸性白土の物理化學的性質（第五報）吸著に依る石油類の脫色」に報告し置きたり、報告末に添付し置きたり、猶引續いて酸性白土の成分研究に入らんとし「酸性白土のX線分析」並に「酸性白土のアルカリに對する溶解度」に就て夫々實驗したり近日發表の豫定にあり。

他に「酸性白土の物理化學的性質」（第五報）「吸著に依る石油類の脫色」（其一、二、三）（工業化學雜誌第三九三號別刷）

X線放射に由來する植物體に於けるneo-plasma予の謂ふ「X線腫瘍」の組織分化に關する研究

研究者　小室英夫
（申出者　本人）

昭和三年以來三ヶ年間になされたる「X線腫瘍の組織分化に關する研究」に對し提出せられたる論文左の如し。

一　X線腫瘍の組織分化に關して攷覈せしそらまめに及ぼせる軟硬兩X線作用の生理學的及細胞學的攷察（原稿）

一　X線放射に由來する植物體に生ぜるネオプラズマ、予の謂ふX線腫瘍〔(1)、(2)〕の組織分化に關する研究（1）エンドカ Pisum sativum のX線腫瘍初期細胞内にて發見せる「絲狀體」（fadenförmiger Körper）に就きて（昭和四年發行日本病理學會々誌第十九年別刷）

1　Sutudien über die Histogenese des von mir als Röntgengeschwulst gedeuteten Neoplasmas (Zellwucherungen), das in pflanzlichen Organen nach Röntgenbes strahlung entsteht. II. Miteilung. Über Gewebeabnormitat als Forge der Mehrkernbildung in den 'tiefgefärbten cytoplasmatischen Zellen' und die Mehrkernbildung aus dem 'chromatolytischen Riesenkern mit tiefgefärbten Multinucleolen' im Wurzelspitzengewebe von Vicia faba. (Ex. fr. Zeitschrift für Krebsforschung. Band 31, Heft 5, S.490–494).

1　Mikrochemische und zytplogische Befunde an rontgenbestrahltem Pflanzengewebe. I. Über 'tiefgefarbte zytoplasmatische Zellgruppen' im Wurzelspitzengewebe von Vicia faba. (Fortschritte auf dem Gebiete der Röntgenstrahlen, Bd. 41, Heft 6. S. 1-2)

一 Mikrochemische und zytrogische Befunde an röntgenbestrahltem Pflanzengewebe. II. Unterschiede zwischen dem 'Naturtod' (Altersschwachetod) und dem Röntgen bestrahlungstod in den Wurzelspitzen von Vicia faba. (Sonderdruck aus Fortschritte auf dem Gebiete der Röntgentstrahlen. Band 42, Heft 6.)

一 On the Histogenetical Study of 'X-Sen-Syuyô' (Röntgen-Tumours) with Special Reference to the Pecuriarity of Active Nuclei and to the Tissue-Abnormality induced therefrom. (Reprinted from 'Gann', The Nipponese Journal of Cancer Research), XXIV: 337, Plates X-XI.

外に本院紀事に採錄せられたる論文左の如し。

H, Komuro: Über die Gewebeabnormität infolge von Riesenkern und Riesenzellentstehung durch Tauchung in Kohlenteerlösung bei Pisum *sativum*-Wurzelspize. (Proc. of the Imperial Academy. Vol. VI. No. 9. p. 375-385)

シノメニウム及びコックルス屬植物含有のアルカロイド研究

研究者 近藤平三郎
（推薦者 小野塚東大總長）

研究報告として提出したる論文左の如し。

一 落合英二、箱崎幸太「シノメニンの構造研究補遺（其二）」（昭和五年四月發行藥學雜誌五十卷第四號別册）

一 近藤平三郎「Sinomenium 及び Cocculus 屬アルカロイドに關する研究（第二十八報）」、近藤龍「衡州烏藥のアルカロイド「コックラウリン」の構造研究補遺」（昭和五月五月發行藥學雜誌第五號別册）

一 近藤平三郎「Sinomenium 及び Cocculus 屬アルカロイドに關する研究（第二十九報）」、近藤平三郎、成田象

一「Dauricin の研究（其三）」（昭和五年六月發行藥學雜誌第五十卷第六號別册）

一 近藤平三郎「Sinomenium 及び Cocculus 屬アルカロイドに關する研究（第三十報）」、近藤平三郎、富田眞雄「鐵牛入石のアルカロイド研究（其二）」（昭和五年七月發行藥學雜誌第五十卷第七號別册）

一 近藤平三郎「Sinomenium 及び Cocculus 屬アルカロイドに關する研究（第三十一報）」、富田眞雄「Trilobin 及び Homotrilobin の構造研究（其五）」（昭和五年十一月發行藥學雜誌第五十卷第十一號別册）

一 近藤平三郎「Sinomenium 及び Cocculus 屬アルカロイドに關する研究（第二十七報）」、矢野謐「シマハスノハカヅラ（倒地拱）のアルカロイドに就て（其三）」（昭和五年三月發行藥學雜誌第五十卷第三號別册）

多相同期電動機特に回轉變流機の亂調に就て

研究者 熊澤尙文
（申出者 本人）

昭和四年度以來計算中なりし實驗結果の一部を、昭和五年四月、東京にて開催されし電氣學會大會にて左の題目にて講演發表す。

「振動運轉せる同期電動機内回轉磁場歪の實測」

回轉體の機械的振動に關する調査研究。

振動運轉せる同期電動機の機械的振動測定。

同期電動機の亂調と其周波數との關係につきての實驗。

亂調せる同期電動機と並列運轉せる非同期電動機に關する實驗。

非同期電動機を同期電動機として運せるものと、亂調せる同期電動機と並列運せる場合の實驗。

三臺同期機の並列運轉時に於ける亂調につきての實驗。

四臺同期機の並列運轉時に於ける亂調につきての實驗。

昭和六年四月名古屋にて開催さるべき電氣學會大會に次の題目にて講演すべく申込、其豫稿の原稿を送付せり。
「多相同期電動機の振動方程式に就て」
送電線に結ばれ居る數箇の同期機の亂調につきての研究豫備として同期機の數箇並列運轉時の振動に關する實驗續行中なり。

脊髓副交感神經系

研究者 沖三吳 中枝 重玄 雄一建
（推薦者 小野塚東大總長）

研究報告未提出

本院紀事に採錄せられたる論文左の如し。

K. Kuré, H. Araki und T. Maéda: Die autonome Innervation des willkürlichen Muskels in ihrer Beziehung zur chemischen Wärmeregulation. (Proc. of the Imperial Academy. Vol. VI. No. 4. p. 171–172)

K. Kuré, S. Okinaka, K. Kawaguzi und T. Shiba:
Histologische Studien über die extropyramidalen Bahnen.
I. Mitteilung. Über periphere Fortsetzung der extrapyramidalen Bahnen. (Ibid., Vol. VI., No. 7. p. 282–284)

K. Kuré, K. Ityko und K. Ishikawa:
Physiologische Bedeutung des Spinal-parasympathicus.
I. Mitteilung. Spinal-parasympathicus und Innervation der Magen-Darmbewegung.
A. Besichtigung der geöffneten Bauchhöhle.

II. Mitteilung. Spinal-parasympathicus und Innervation der Magen-Darmbewegung.

K. Kuré, T. Shiba, K. Kawaguzi und S. Okinaka:
Histologische Studien über die extrapyramidalen Bahnen.
II. Mitteilung. Über Endigung der extrapyramidalen Bahn und akzessorisches Endplättchen parasympathischer Natur. (Ibid., Vol. VI., No. 8. p. 321–330)

植物色素の化學的研究（青花の色素）

研究者 黑田チカ
（推薦者 眞島會員）

研究報告未提出

本院紀事に採錄せられたる論文左の如し。

C. Kuroda: The Colouring Matter of "Awobana." Preliminary Report. (Proc. of the Imperial Academy. Vol. VII., No. 2. p. 61–63)

インダンスレン熔融の化學に關する研究

研究者 牧 銳夫
（推薦者 小野塚東大總長）

「インダンスレン熔融の化學に關する研究（第一報）アルカリ熔融に於けるインダンスレンの分解速度」（工業化學雜誌第三八一號別冊）「インダンスレン熔融の化學に關する研究（第二報）150°C に於ける 2 アミノ、アンスラキノンのアルカリ熔融」（同上別冊）「インダンスレン熔融の化學に關する研究（第三報）石炭酸の存在に於けるインダンスレン熔融」（同上第三九三號別冊）「インダンスレン熔融の化學に關する研究（第四報）石炭酸を添加剤とする熔融に於ける反應溫度に就て（同上別冊）の提出あり。

鶏に於ける性の決定及び分化に關する研究

研究者　増井　清
（推薦者　石川會員）

鶏に於て雌雄の皮膚及び生殖腺の交換移植に依り實驗的「キナドロモルフ」を作り之に依りて遺傳的性の分化と「ホルモン」に依る第二次性の分化との關係を明かにし又ベザール氏の實驗的「ギナンドロモルフ」の誤りなることを證明せんとする目的を以て研究を進めつゝあり。

實驗に供したる鶏の雛は約百二十羽にして孵化後十日以内に雌雄の皮膚の交換移植手術を行ひたり。實驗雛の大部分は孵化四十日前後に生殖腺を除去し次に之に反對性の生殖腺を移植し又一部には兩性の生殖腺を移植したり。此の實驗に依り既に五例の實驗的「ギナンドロモルフ」を得たり。目下移植生殖腺の發達に伴ふ移植皮膚の變化を觀察しつゝあり。

脊椎動物の染色體に關する研究

研究者　〔蓑内　二　収
外　名〕
（推薦者　新城京大總長）

脊椎動物の染色體に關する研究は數多くあれど、染色體數をすら正確に決定し得たるものは甚だ稀なり。報告者中蓑内は氷醋酸が核の固定に有實なること及びクロム酸、重クロム酸、オスミツク酸が一般動物の染色體をよく固定することを確めたり。これら藥品の組合及び濃度は動物の種類、年齢その他生理狀態によりて異ることを既に報告せり。これら藥品よりなる固定液の濃度はその動物を構成する細胞の滲透壁のみならず、又その細胞中に含まるる物質によりて支配さるるものにして、その細胞の新陳代謝度（metabolic gradient）をも考慮せざるべからずと考ふるに至れり。

脊椎動物中哺乳類に於ては、白鼠、犬、猫、南京鼠、狸に就きて既に發表せり。モルモットは目下論文起草中なり。本年新たに研究せるものは兎にして、その染色體數は二倍數（常數）四十四、單位數二十二なり。

性染色體は他の哺乳類と全く同型即ち XY 型なり。人間の染色體は目下研究中なれども、正常なる材料を得難く的確なる數字をこゝに報告し得ざるは甚だ殘念なり。固定液は白鼠と同樣のものにて充分なることを確め得たるのみなり。

爬蟲類にありてはヤマカガシ、マムシ、シマヘビ、アホダイショー、カメ、Takydromus tachydoromoides, T. septentrionalis, T. formosanus. Emeces latiscutatus, Gekko japonicus, Hemidactylus bowringii, Japarula swinhonis に就き染色體數を決定し、性染色體は XX 型なることを確めたり。Tachydromus tachydromoides を除きたるトカゲ類の染色體數の豫報を Proc. of the Imp. Acad. に原稿を送り本報は目下起草中なり。

兩棲類にありては雨蛙、ヒキ蛙、トノサマ蛙、土蛙、キモリに就きては既に報告せり。右の中トノサマ蛙、土蛙、キモリは目下論文起草中他は發表濟なり。本年度研究の分はハンザキ（染色體の二倍數六十四、單位數三十二）及魚類中のメダカ三種 Aplocheilus latipes（二倍數四十八、單位數二十四）、Oryzia latipes（單位數二十四）Lebistes reticultus（單位數二十三）なり。兩棲類、魚類は共に性染色體の分化度低し。以上より考ふるに哺乳類の性染色體はべて XY 型、爬蟲類は XX 型、兩棲類は性染色體の分化の度甚だ低く、魚類も同樣なり。メダカに於て會田氏の云へるが如き XY 型或は XXY 型の性染色體を認むること能はず。故に會田氏のメダカに於ける色の遺傳の說明は再考の要ありと信ず。一般に性染色體と系統との關係は昨年報告せる如く下等より高等に進むに從ひ、性の分化も又性染色體の分化も著しくなるものにして、報告者等の考はその後の研究によりても何等變更の要なく、益々事實を裏書するに至れり。

恙病原體の確定　研究者　會員　宮入慶之助
（申出者　本人）

研究報告　未提出

ブラシカ屬の細胞學的及實驗遺傳學的研究　研究者　盛永俊太郎
（申出者　本人）

研究報告として Another New Chromosome Number in Brassica. (Botanical Magazine, Vol. XLIV, No. 523 拔刷)、「雲臺種子の發芽に就て」（九州帝國大學農學部學藝雜誌第四卷第一號別刷）の提出あり。

朝鮮に於けるカンブリヤ系の層序學的研究　研究者　中村新太郎
（推薦者　新城京大總長）

研究報告　未提出

電子波の反射並に屈折　研究者　西川正治
（推薦者　小野塚東大總長）

研究報告　未提出

新しき三糖體と其の誘導體について　研究者　西田屹二
（推薦者　松浦九大總長）

研究報告として提出したる論文左の如し。

一　西田屹二、高木德一「木材ペントーザンに就て（第一報）」（昭和五年七月十五日發行纖維素工業第六卷第七號別刷）

一　Kitsuji Nishida und Hideo Hashima:—Chemische Untersuchungen über das Glukomannan aus 'Konjak.'

一　西田屹二、卯尾田秀隆「マツケムシ油に就ての知見」（昭和五年十月十日發行林學會雜誌第十二卷第十號別刷）

一　西田屹二、羽鳥秀雄「蒟蒻より得らるゝグルコマンナンの化學的研究、第一報　蒟蒻よりグルコマンナンの精製法」（昭和五年十一月發行日本農藝化學會雜誌第六卷第十一冊第七十四號）

一　西田屹二、卯尾田秀隆「イヌマキ枝葉油に就ての研究、第一報　含有成分に就て」（昭和五年十二月發行日本農藝化學會雜誌第六卷第十二冊第七十五號）

一　西田屹二、深水德一「木材の分解數に就ての研究」（昭和五年十二月十日發行林學會雜誌第十二卷第十二號別刷）

一　西田屹二、仲寞「腐朽木材の化學的研究（第一報）、淚菌に因る腐朽木材に於ける成分の變化に就て」（昭和六年一月十日發行林學會雜誌第十三卷第一號）

野生菊屬諸種の遺傳研究　研究者　野原茂六
（推薦者　池野會員）

神代、歡聲、壽、秋美、天授、百福、白ダーナ、黃ダーナ、桃色ダーナ、景清、秋光、翠簾の風、香風の波、此等は主として花色の單純なるもの又自殖（自家受精により繁殖の意）交配に便利なる花形を有するものを選びたり、然れども遠路の輸送と移植時季の幾分後れたるを以て若干品種の枯死を見たり、尙今日まで開花せしものありし

が貧弱なるもの多かりき、次年には使用し得べきものと思はる、又從來培養し來りし野生菊屬のもの及最近蒐集せしものを擧ぐれば次の如し。

のぢぎく　I II III
あふらぎく　I II
はまかんぎく　I
いそぎく　I II
りうのうぎく　I II III
はまぎく　I II
こはまぎく　I II
しろばなあぶらぎく　I II

右の野生種各號は夫々產地の異なるものを一株宛選びたり、此外野生種に近き外觀を有する左の栽培菊をも採用せり。

黃（色）料理菊　I　樺（色）料理菊　I　赤樺菊　I　黃細裂菊　I

以上列擧せし諸種の內本年秋實驗を行ひしもの又尙行ひつゝあるもの左の如し。

のぢぎく　I　の自殖
同　×　はまかんぎく
同　×　黃料理菊
同　×　樺料理菊
のぢぎく　I　×　赤樺菊

のぢぎく　II　の自殖
同　×　はまかんぎく
同　×　黃料理菊
同　×　樺料理菊
同　×　赤樺菊
のぢぎく　III　の自殖
同　×　はまかんぎく
同　×　黃料理菊
同　×　樺料理菊
同　×　赤樺菊
はまかんぎく　の自殖
同　×　のぢぎく　I
同　×　のぢぎく　II
同　×　のぢぎく　III
黃料理菊　の自殖
同　×　のぢぎく　III
樺料理菊　の自殖
同　×　のぢぎく　III
赤樺菊　の自殖

同　　×　のちぎく　I
同　　×　のちぎく　II
同　　×　のちぎく　III
あぶらぎく　の自殖
りうのうぎく　の自殖
はまぎく　の自殖
こはまぎく　の自殖

等にして來年の準備をなす。

又去る十一月二十八日より十二月五日まで野生菊屬採集の爲兵庫縣大鹽町及山口縣柳井町地方に出張し、のちぎくの野生狀態を觀察し又若干採集して歸校す、此の材料に就ては目下調査中なり。

外に寫眞二十四枚添付せり。

朝鮮に於ける地方病的關節疾患に就て
（所謂朝鮮の土疾に就て）

研究者　小川　蕃
　　金　明　學
（推薦者　志賀城大總長）

十有餘年前咸北茂山地方に原因不明なる關節疾患、即ち膝關節、肘關節、指骨及趾骨間關節の骨端が肥大及變形を來し、膝關節及肘關節には運動障碍を伴ふ疾患がある事が知られて以來數氏の調査報告あるも未だ本病本態に就いては未知の域にして唯統計的觀察に過ぎず。

數氏の調査報告及民間に於いて傳ふる所を蒐集し考ふるに本病は茂山地方にのみ限局せるものとは想像し難く、

尙ほ發病の原因的關係及發病地に於ける狀況等を詳細に探究する必要ある以て我が教室にては廣範圍に亘り本病の分布狀態及患者の生活狀態其他地理的關係並びに地方民の云ふ所等を實地に調査せんと欲し、豆滿江及鴨綠江沿岸に於ける山間僻地を調査したる結果本病は茂山地方に固有なる疾患にあらずして、咸鏡南道（甲山、三水、長津諸郡）及平安北道（原昌、慈城、江界諸郡）等にも廣く分布せるを知りたり。此等の地方に於いて合計四百六十人の患者を調査し、其の中四名を京城帝國大學醫學部附屬醫院に入院せしめ檢索の結果、本病本態に對し一道の光明を認め得たり。患者年齢は殆んど四十以上にして其の中にも五十歲以上のもの最も多し。發病の年齢に就いては其の開始徐々なるが故に斷定を缺くも、二十歲以內にして十二、三歲より十五、六歲に罹病したるもの大多數を占む。

肉眼的觀察による發病部位を列記せば、余等の詳細に調査し得たる一五〇名の中、男子一〇七名に於ては畸形腫大、機能障碍を呈せる關節は左の如し。

膝關節	一〇六名
肘關節	九七名
掌骨及指骨間關節	七二名
足關節	五七名
腕關節	五五名
肋骨及肋軟骨境界	三七名
趾骨間關節	二七名

にして、女子四三名に於ては

膝關節	四一名
肘關節	二八名

腕關節	二一名
掌骨及指骨間關節	一八名
足關節	一〇名
肋骨及肋軟骨境界	六名
趾骨間關節	三名

上記の如き順序にして男女何れに於ても殆んど全數膝關節及肘關節に病變を認め、此等大關節に於ける變化最も大にして膝關節、肘關節の運動制限は勿論X脚O脚等を示し、歩行不能なる者もあり。

上述の患者前後四名を我が教室に學用患者として入院せしめ、骨並に關節に對し詳細なる檢査をなしたるに、X線像に於て上記關節端に於て所謂畸形性關節炎に相當する骨變形を明かに認め得たり。

此の外肉眼的檢査に於て何等變化を認め得ざりし肩胛及股關節に於ても、輕變ながら同樣の變化の存在するを知り得たり。即ち本患者は全身關節に於ける對稱性畸形性關節炎とも稱すべきものなるを知り得たり。

尙入院患者に就きては植物性神經系統緊張度「カルチウム」並に燐代謝を檢索したるも血清「カルチウム」量の僅かなる增加傾向の外何等特に認むべき變化を證明し得ざりき。

以上は第一、第二回奬學資金による研究結果の大要なり。本病は上述の如く地方病的に患者の密集する所と離も其の年齢は多く高齢者にして、本病發生地方と離も交通開け、物資の供給潤澤となりたる現今に於ては著明なる症狀を以て現在發病しつゝあるものは甚だ少く、時に發病を見ると離も甚しく輕度のものに止まり、之を新たに發病しつゝあるものとなすべきか或は所謂土疾患者を兩親としたる結果招來せられたる一種の Keimdegeneration の結果先天性に上述の如き變化を招來するに至りたるものなるや尙疑の存する所なり。然るに玆に注意すべきは昨年の調査に於ては鴨綠江支流最上流地方に於て、全く所謂土疾を知らざりし地方より移住したる開墾者間に本病の發

生しつゝあるを明かにし得たる點なり。

外に「西北朝鮮に於ける地方病的骨疾患の分布圖」一葉を添付せり。

ナウマン氏のフオッサ・マグナ（主に信越地方）に於ける地質學的研究

研究者　會員　小川琢治　横山次郎　本間不二男
（推薦者　新城京大總長）

第二百三十九回本院總會（昭和五年十一月十二日）に於て、小川會員は本院より補助金を受け研究の結果作製するに至りたる「信濃國中部地形及地質圖」を提出し且つ其の概要に就き說明するところありたり。

含硫黃アミノ酸に關する研究

研究者　奥田讓（申出者　本人）

一　含硫黃アミノ酸に關する研究（第十報）日本農藝化學會雜誌第五卷第十一册。
二　チオグライコール酸のシスチン定量に及す影響（九川帝國大學農學部學藝雜誌第四卷第一號）

目下研究中の題目次の如し。

一　蛋白質加熱の際に於ける含硫黃アミノ酸の分解。
二　含硫黃アミノ酸の微量定量法。

櫻鱒並に琵琶鱒交配試驗

研究者　大島正滿
（推薦者　小野塚東大總長）

研究報告　未提出

桑玉蠅の研究

研究報告　未提出

研究者　會員　佐々木忠次郎
（申出者　本人）

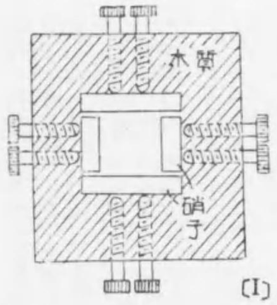
廻析格子の製作

研究者　佐藤瑞穂
朝野虎治
（推薦者　本多會員）

一　目的

セルロイド薄膜上に鋭き針の尖端にて適當なる等しき距離に凹點を刻したるもの十數枚を重れて立體的格子を製作せんとす。

二　第二の試み

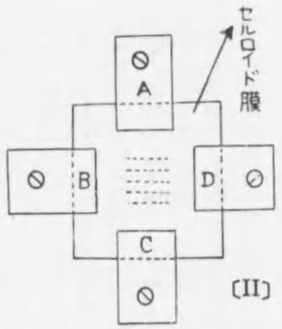


〔I〕

木綿縫針直徑〇・五粍のもの千六百本を選び之を圖に示すが如き横斷面積四平方糎なる枠にて束れ之を平面硝子板上に置き電磁石を用ひて尖端を揃へ以て針束を作る、寫眞I針束一にて示すが如し。

次に此針束をセルロイド膜上に輕く載せ其面に凹點を刻ましめ更に針を並べたる方向に於て針束を針の直徑を等分せる距離だけずらしつゝ凹點を刻ましむれば セルロイド膜上一方向に於て等距離に並びたる凹點列を得べし、斯の如き操作を直角なる方向に於ても行ひ等距離に凹點を有するセルロイド薄膜を製作せり。製作に當りては膜をA、B、C、Dなる押へによりて固定せり。次に第二枚目の膜を刻まんとせばAとC（又はBとD）とを離し第一枚目の膜の上に第二枚目の膜を載せAとC（又はBとD）を以て緊く之を押へしめ前記の方法により て凹點を印せしむれば可なり。斯る方法を繰返してセルロイド薄膜の八枚重れ合されたるものを得たり。此等の夫々に對應する凹點は總て同一直線上に並ぶものなるべし。故に之をば平面硝子板を用ひて上下兩面より強く押へ以て立體的格子の一を得たり。

以上の如くして得たる立體的格子の面に垂直になる如く水銀燈の強き光を投射せしめたるも面白き結果を得ざりき。寫眞IIに示すが如し。



〔II〕

三　第一の試みの失敗の原因

一　セルロイド膜が比較的厚かりし爲光の吸收せらるゝ量多く寫眞乾板には直進せる光に感じたる黒點のみ現はれたり。

二　製作上の缺陷として

a.　針の尖端が針の軸上に無きこと

各針の直徑は等しきも其尖端が軸上にあらざるを以て針を束ねたる際各尖端間の距離不同となる。

b.　針の尖端が一平面内に無きこと

針を束ねる際前記の如く電磁石を用ひて之を硝子板上に垂直に立て側面より「ネヂ」にてしめつくるときは軸の方向にかすかにずれて總ての針の尖端が一平面内に在り得ざる缺點あり。

四　第二の試み

前記の如く第一の試みに於ては針を方列型に排列したるも、其結果は豫期に反したるが故に第二の試みとして針の尖端を一直線上に於て等距離に並べたるものによりて第一の場合よりも多少薄くして透明なるセルロイド膜に凹

點を刻したり。其採用せし方法は前記の如くなるも此際に於ける針束の製作は次の方法による。寫眞 III は其實驗裝置を示すものなり。先ず電磁石Mを用ひて針の尖端を一直線上に並ばしめ顯微鏡はよりて其尖端の條件を出來得る限り正確に滿足せしむ。而して此針群の周圍に豫め用意せる封蠟をヨウユール熱によりて融解せしめ之によりて針束を製作せり。之寫眞 IV に示すが如きものなり。(實驗裝置の說明は別紙に記載せり)。第二の試みによるものを針束二とす。

五　第二の試みの失敗

針束二を用ひたるセルロイド膜一枚による廻折スペトルは寫眞 V に示すが如し。斯る膜を重れて實驗を用ひたるも其結果は II の場合の如くにて面白からず。此失敗の原因を調べたるに針束二の尖端間の距離の不同なる事に基くものゝ如し。これ封蠟の融解及凝固に際し針のかすかに動くことによるものにして封蠟の融解中、其外れを補正せんとせしも其一を動さばそれの附近にある他のものも同時に動きて希望せしが如き補正を行ふ事能はざりき。之を要するに各個の針を一つ一つ統御すべき裝置（例へば化學天秤に於けるライダーを動かす裝置の如きもの）を工夫せざれば此方然にては目的を達すること能はざる事を知れり。

六　第三の試み　其裝置は寫眞 VI に示す。尙別紙の說明を參照せられ度し。

尖端の鋭き一本の針を用ひて一個づゝ凹點を刻みたり。而して製作したる格子の面積十六平方粍にして凹點間の距離は百分の一粍セルロイド膜の厚さ七分の一粍なり斯樣にして製作したるセルロイド膜一枚をとりて其面に垂直に光を投射せしに寫眞 VII に示すが如く規則正しく排列せる點狀廻折スペクトルを見る。此際使用せる光源は水銀燈なり。尙かゝる膜を五枚重れ合せて立體的格子を作り實驗を行ひたるも寫眞乾板上には直進せる光に强く感ぜる中央の黑點を圍みて規則正しき陰影のかすかに數個現はれしのみ。寫眞 VIII にて之を示す。此實驗の結果の餘り面白からざるは曝露の時間不充分なりしこと及びセルイド膜による光の吸收に基くものならん。此點を充分考慮せば良結果を得べき事と信ず。目下最も良き條件を研究中なり。

七　第三の試みに於て困難と感じつゝある點

目盛機械を互に直角の方向に移動する如く改良したるも尙目下困難と感じつゝある點を擧れば次の如し。

一　長時間を要し其間不斷の努力を要するを以て相當疲勞する事

二　針の尖端の壓力を如何にして小とすべきか

硝子板を用ひたる十字格子の製作

硝子板上互に直角をなす方向に於て各一種につき一千の割合にて平行線を刻みて十字格子を製作せり。之により水銀の廻折スペクトルは寫眞 IX に示すが如し。尙寫眞 X は一種につき二百本の割合にて平行線の刻まれたる格子（細隙の幅と線條の幅と相等し）二枚を互に其線條が直角となる如く重れ合せたる場合に於ける廻折スペクトルを示す。但し此最後のもののみは、今回製作せしものにはあらず。セルロイドは光を多量に吸收するを以て格子を製作するには材料として硝子を使用する方得策なれば今後は暫く硝子板を用ひて研究せんとす。而て其製作に當ては顯微鏡を使用し十字線によりて通常の格子を其線條が互に直角となる如く交互に重れ合すこと、せん。斯る方法も亦可なりと信ず。

別に寫眞拾葉及其說明書を添付せり。

太陽大氣の一循環氣流に關する統計的研究

研究者　關口鯉吉
（推薦者　小野塚東大總長）

太陽黑點其他太陽面に出現する斑點の運動を統整して、氣流の狀勢を窺ひ、其等事象の生成機巧を探究せんとするものにして、昭和五年に於ては主として雙黑點に附隨せる小黑分布を調べ、主黑點の相對運動と相待つて氣流の狀勢を明かにし得たり（日本天文學會要報第一號參照）。

ポーラログラフに依る微量有機化合物の電解還元壓研究

研究者 志賀館 方益三勇
（推薦者 新城京大總長）

本研究は昭和二年度に於ては Pyridine, Nicotinic acid, Acetone, Acetoin, Diacetyl, Acetophenone, Benzoin, Benzil に就きて其の測定を了したり。(Memoirs of the College of Agriculture, Kyoto Imperial University, No. 4 並に、有機化合物電解還元壓研究（第四報）參照)

昭和三年度に於ては Acetylacetone, Benzoylacetone, Dibenzoylmethane 及び Diphenyltriketone の電解還元壓を測定したり。(別刷第五報第六報) 猶 Nitrophenot, 酸素、鐵鹽、ヘモグロビン、メタヘモグロビン、ヘマチソの電解還元壓を測定したり。(第七報參照) 之に依りて生體内殊に血液内に於ける酸化還元系に就きて成種の知見を與ふるを得たり。

本年度に於ては更に複雜なる場合の問題を解決せん爲、還元基を二個有し且解離非解離の二態を有し得る Dinitrophenot の電解還元壓を測定しつゝあり。猶 Bilirubin の電解還元壓を測定し、其の Acetone の存否に依る電解還元壓の差異を求めたり。

猶滴下水銀極に依る電解還元壓測定の理論的意義を更に明かにせん意圖を以て、靜止水銀極及び白金其の他金屬を電極とせる場合の電解還元の差異を明かにせん爲め目下實驗中なり。

猶電極に於けるコロイドの態度に關しては、猶不明に屬する事項多きを以て、之が電極に於ける態度並に電極還元壓に及ぼす影響を檢しつゝあり。之本法を清酒醬油の如き醱酵生成物中の微量被還元物質の定性及び定量に應用する場合に極めて重要なる問題なるを以てなり。要するに私共研究の成績及びポーラログラフ應用の範圍等に關しては「ポーラログラフ及其の應用」(工業化學雜誌三三編一二冊一四六二—一四七〇頁（昭和五年十二月)) の一文を草したるに依り之に其の大要を見るを得べし。(別冊附隨) 該別冊中第四圖に今日迄得たる結果（二例を除き全部私共測定結果）を表示したり。之を昨年提出したる電解還元壓測定一覽表に比するに新に追加せるは Dinitrobenzene Dinitrophenot（各異性體）mono-, di-, tri-, tetrachloretheylenes 等にして之等に關しては近く農藝化學會誌に發表の豫定なり。

而して該別冊に於て論じたる如く、本法を一般の有機化學及び生化學に應用せんが爲めには、猶爲す可き基礎的研究多く殊に電解還元壓表の完成並に電極反應に就きての附隨條件變化の影響に就きては猶不明に屬する點少からず、今後の研究に俟つべきものなり。

添　附　別　刷

(1) 有機化合物電解還元壓研究（第八報）
(2) Memoirs of the College of Agriculture, Kyoto Imperial University, No. 8.
(3) ポーラログラフ及び其の應用（工業化學雜誌三三編一二冊、一四六二—一四七〇）

キジムシロ屬に於ける染色體數と種の形成及系統

研究者 下斗米直昌
（推薦者 吉田廣島文理科大學長）

研究報告として「きじむしろ屬に於ける染色體數と系統に就いて」(植物學雜誌第四十四卷第五百二十五號拔刷)、Chrompsomentahlen und Phylogenie bei der Gattung Potentilla (Journal of Science of the Hiroshima University. Series B, Div. 2, Vol. 1, Art. 1 拔刷 の提出あり。

X線に依る鋼の成分の定量分析

研究者　志村　繁隆
（推薦者　小野塚東大總長）

一　既に研究を終了せる處は「鐵と鋼」昭和五年九月號誌上に發表せり。
二　本研究は目下進行中にて今後は從來のX線寫眞法のみに限らず、イオン化現象を利用すべく日々其方面の實驗を爲しつゝある次第なり、かゝる實驗は各國共未だ始んど行はれず最も新らしき研究境地なれば必ず面白き結果を得ることゝ確信致し居る處なり、何れ論文發表す。

間腦に於ける諸核機能に關する實驗的研究

研究者　篠崎哲四郎
　　稲田宣男
（推薦者　志賀城大總長）

研究報告として「間腦特にルキス體に關する實驗的研究」（第二六回日本内科學會總會演說抄錄）、「灰白結節機能に關する實驗的研究」（第二七回日本内科學會總會演說抄錄）、「赤核機能の知見補遺」（第十八回朝鮮醫學會演說原稿）、「乳嘴體機能に關する實驗的研究」（第十八回朝鮮醫學會總會に於て發表）、「ルキス體（Corpus Subthalamicum Luysi）の瞳孔神經支配」（福岡醫科大學雜誌第二十三卷第十號別刷）、Reizversuche zur zentralen Pupilleninnervation am Corpus Luysi. (Zeitschrift für die gesamte experimentelle Medizin. Band 66, 1. u. 2nd Heft) の提出ありたり。

植物の性染色體に關する研究

研究者　篠遠喜人
（推薦者　小野塚東大總長）

研究報告　未提出

本邦内種々の氣候に適應せる梨樹品種の果實の化學的及び組織學的研究

研究者　立花千秋
（申出者　本人）

研究報告　未提出

アミノ酸類の理論化學的乃至生化學的研究

研究者　高橋學而
（推薦者　平沼日大學長）

昭和五年中の實驗細目並に寫眞（十三葉）の提出あり。尙外に本院紀事に採錄せられたる論文左の如し。

Takahashi, G. and Yaginuma, T.
Physikochemische Untersuchungen über Aminosäuren.
II. Mitteilung (Proce. of the Imperial Academy. Vol. VI., No. 2)
III. Mitteilung (Ibid., Vol. VI., No. 5)
IV. Mitteilung (Ibid., Vol. VII., No. 2)

植物の不稔性に關する細胞學的研究

研究者　竹中要
（推薦者　志賀城大總長）

研究報告　未提出

卵子孵化の化學

研究者　富田雅次
（申出者　本人）

研究報告として提出せる論文左の如し。

M. Tomita; Beitrage zur Embryochemie der Reptilien. (Journal of Biochemistry, Vol. X, No. 2., pp. 351–449.)

〃 ; Zur Chemie der Gastropodenrern. (Chemie der Eibebrütung, XXXV.)

M. Tomita und M. Takahashi; Embryochemischen Untersuchungenmittels der Injektionsmethode 1. Ueber die Harnsäurebildung im Organismus des Hühnerembryos. (Hoppe-Seyler's Zeitschrift für physiologische Chemie. Band 184. Heft 6.)

J. Kaieda; Embryochemische Untersuchungenmittels der Injektionsmethode. II. Ueber die Harnstoffbildung im Organismus des Hühneremryos. (Ibid., Band 187, Heft 4 u. 5)

K. Kusui; Embryochemische Untersuchungenmittels der Injektionsmethode. III. Über das Verhalten des Cholesterins im bebrüteten Hühnerei bei Adrenlin und Ephedrininjektion. (Ibid.,)

E. Kataoka; Ueber das Verhalten des Glykogens im bebrüteten Hühnerei bei der Zuckerinjektion. (Chemie der Eibebrütung, XXXVI.)

稻の成長期中各週に於ける成長量の變化に就て

研究者　植田宰輔
（推薦者　吉川會員）

一　供試水稻品　出雲錦

一　苗代本田共に約五萬分の一反歩の表面積を有する陶器製鉢を使用す。

一　苗代に用ひたる一鉢中の土壤中の窒素、並に用ひたる種子の玄米中の窒素の定量を行ひ播種後毎週一定の材料を採りその葉面積、根數、草丈、乾物量（地上部並びに根）及び乾物中の窒素の定量を行ひたり（用ひた肥料中の窒素の定量も亦行ひたり）。

一　苗代第六週目に本田に移植一本植とす、本田に於ひては窒素、燐酸、加里の完全肥料區、窒素、燐酸區、窒素、加里區、燐酸、加里區、並びに無肥料區の五區を分ち、毎週各區一鉢宛を採りその材料に就き葉面積、根數、乾物量（地上部及び根）及び乾物中の窒素の定量を行ひたり（本田に用ひた土壤並びに肥料中の窒素の定量も亦行ひたり）。

一　右の内窒素の定量及び葉面積（理研陽畫感光紙に葉形を現象しそれを切抜きてその重量を測定し、前紙の一定面積に對する重量との比較により間接に測定す）の測定に就きては今日尙經續中なり。

一　猶異品種に就き異つた氣候、土地に就いて此研究を繼續せんことを欲す。

家蠶の退化交尾器に關する遺傳學的研究

研究者　梅谷與七郎
（推薦者　石川會員）

研究報告未提出

本院紀事に採錄せられたる論文左の如し。

Y. Umeya; On the Inheritance of the Abnormal Genitalia and Its Environment in the Male-Moth of Bombryx Mori L. (Proc. of the Imperial Academy. Vol. VI., No. 7. p. 285–288)

Duplication of sexual Organs in the Male-Moth of Bombryx Mori L. (Ibid., Vol. VI.. No. 9. p. 371–374)

臺灣第三期有孔蟲岩の層位學的研究

研究者　會員　矢部長克
　　半澤正四郎
（申出者　本　人）

昨昭和四年度外業及び内業に於て得たる結果は既に昨年十一月貴院に提出せる事業報告にあり。又地學論叢（小川博士還暦紀念）中に登載印刷に附せしかど玆には今年從事せる外業及内業に新に知り得たる事項の概要を記述せんとす。

半澤は本年三月二十一日仙臺發同六月二十八日仙臺歸着迄左の行程を取りて昨年調査し得ざりし個所を巡檢せり。

臺北—新竹州苗栗—大湖郡大湖—細道邦（セトパン）—司馬限（スマハン）—二本松—雪見—榛—中間—結城—新竹州竹東郡佐藤—田村臺—瀨戸—井上—シパジー—上坪（シャンピン）—竹東—新竹—桃園—大溪郡大溪—角板山—ラハウ—境—カウイラン—幸原—西村—臺北州羅東郡小林—ポンポン—濁水—礁溪—文山郡坪林—宜蘭郡頭圍—大里簡—基隆郡双溪—大里簡—基隆郡三貂角—澳底—撈洞—鼻頭角。

以上臺北—司馬限、苗栗層、海山層、加裡山層、

司馬限—井上、加裡山層

井上—竹東、加裡山層及海山層

角板山—濁水、海山層、加裡山層及埔里層

鼻頭角—金爪石—基隆—金包里—富貴角—溪水—臺北

以上主として隆起珊瑚礁の調査

臺北—高雄—高雄州岡山郡大崗山—小崗山、半屏山—壽山—鳳山郡鳳山—潮州—恒春郡恒春—鷲鼻—港口—謝滿里—恒春—四重溪—高雄—彌陀寺泥火山—滾水（クンツイピン）坪泥火山。

以上主として琉球石灰岩、及隆起珊瑚礁の調査

高雄—屏東郡六龜—藤枝—溪南山—頭前山—瀧見—日出—見晴—臺東廳里壠支廳出雲—壽—桃林—溫泉—北絲（パシカウ）嶺—鹿野—臺東。

以上臺東山脈を構成せる苗栗層、觸口山層の調査

臺東—知本—大麻里—大武—淡水營—高雄州潮州郡歸化門—高雄。

以上結晶片岩及埔里層の調査

臺中—臺中州彰化郡花壇—南投郡草屯。

以上臺地礫層と觸口山層との關係

臺中—草屯—臺中州能高郡國性庄龜子頭—北山坑—埔里—魚地—日月潭—集口。

以上觸口山層、苗栗層、海山層、加裡山層、埔里層の調査に從事せる外日月潭の地形及構造につき觀察す。

臺北—鳥來（文山郡）

加裡山層の調査

臺北—北投—中青學—淡水—新莊郡五股坑。

臺地礫層、觀音山安山岩の調査

臺灣嶋に發達する地層の分類に關しては昨年既に報告せる所の如くにして本年度に於ける上揭線路に沿へる調査に於ては更に變更を要せざるを知れり。即ち

一　隆起珊瑚礁

二　臺地礫層

三　琉球石灰
四　觸口山層
五　苗栗層
六　海山層
七　恒春層
八　加裡山層
九　補里層
十　結晶片岩

と大別する事の適當なるを益々確信するに到れり。

一　隆起珊瑚礁

隆起珊瑚礁の調査は昨年は南部に限り北部の者は之を檢證するの機なかりしが本年は北部の者をも調査するを得たり。北部即ち臺北州基隆郡深澳、嫌仔寮(ギナリヨウ)海岸に於て海面より約二米の高さに發達する隆起珊瑚礁あり。其少しく北方に於ては之と同層位に隆起海濱堆積物あり。其厚さは海面より約七米の高さに及ぶ。

又基隆の北方宮貴角附近に於て海面上二、三米の高さに上昇せる珊瑚礁ありて低き海岸段丘の所々に點在するを見る。

以上隆起珊瑚礁は造礁珊瑚の密集よりなり局部的には既に珊瑚石灰岩となれる所あり。

嫌仔寮海岸に於ける隆起海濱堆積物は珊瑚及び貝殼の細かき破片と有孔蟲殼の集積にして成層す、而して前二者は鑒定不可なるも有孔蟲は保存良好にして次の種は高雄州恒春郡槃丁の東南方五百米の地點に於て隆起珊瑚より採集せる者と殆ど同種にして現今臺灣周緣の淺き海に生棲する者のみなり、琉球石灰岩中に特有なる Cyloclypeus

gümbelianus Carpenteri Br. and Baculogypsinoides spinosus Yabe and Hanzawa は隆起珊瑚礁中に發見されず。

隆起珊瑚礁は安房國沼の隆起珊瑚礁及上總國大東具層に對比すべき者にして現世の堆積にかゝる者なり。

隆起珊瑚礁及隆起海濱堆積物中に含有する有孔蟲 (1)槃丁 (2)嫌仔寮

	(1)	(2)
Amphistegina radiata (F. & M.)	X	X
Baculogypsina sphaerulata (P. & J.)	X	
Calcarina spengleri (Gemelin)	X	X
Cibicides ungeriana Orb.		X
Cristellarixa gibba d' Orb.		X
Eponides repandus (F. & M.) var. concamerata Montagu		X
Elphidium crispus Linné	X	X
Gypsina globulus Reuss	X	
Operculinella venosa (F. & M)	X	
Quinqueloculina reticulata d' Orb.	X	
Sorites duplex Carpenter		X

二　臺地礫層

この者は桃園臺地の表面を蔽ふ外邊か南方に連續して西恒春及び鷲峯鼻臺地の表面に於て琉球石灰岩を蔽ひて共に傾動せり、同樣の礫層は臺東地溝帶に於ても發達する事前の報告に記せる如くなり。

礫層の表面は赭色の土壤により蔽はるゝ外礫間を膠結する土壤は同樣に赭色を呈す。然れ共之等の事實は礫層の表面に於てのみ見らるゝ所にして下部は赭色を呈せず即ちこの礫層堆積當時の氣候は赭色岩層生成の當時よりも寒

冷なりし事を思考せしむ。

新竹州大溪郡内柵及び臺中州東勢郡水井子に於て發見されし舊象及舊犀の化石は嘗て臺中礫層中に埋藏されたりし化石と思考せらるゝ者にしてこの礫層は矢部の「最近大陸期」以後の成生にかゝり、即ち更新期の堆積物にして關東地方の成田層群に相當する者なり。

三　琉球石灰岩は以前、更新期の者と考へられ來りしが其後余等の研究により恐らく第三紀の者なる可しと考へらるゝに至りしが今回下淡水溪の深き溯谷が琉球石灰岩を切り込める事を注意し、琉球石灰岩は明らかに「最近大陸期」以前の成生物にして鮮新期の者なる事を知るに到れり。

四　觸口山層より、

五　海山層迄整合的に重れる事確實なり。

六　恒春層の時代は明確に知る能はざるも多分海山層と同時代の者なるべし、この者は他の地層と常に斷層を以て接し化石の產出に乏しく時代、層位の判定困難なり。

七　加裡山層は埔里層に整合的に重なる如く見ゆる所あるも其層位關係は尙十分詳かならず。

加裡山層と海山層の間には著しき埔積の時代の差あり。

八　埔　里　層

今回高雄州屏東郡蕃地溪南山、頭前山附近に於て埔里層中に始新期の Assiluna sp. 含有する砂岩及泥灰岩、又高雄州郡蕃地ライ社に於て同じく埔里層より Discocyclina sp. を含有する不純石灰岩を發見せり、後者は既に昨年報告せる潮州郡蕃地クナーウ社の Nummulites & Discocyclina を含む石灰岩の連續なる事確實なり。

この他臺中州能高郡蕃地霧社附近の埔里層中より早坂教授及び丹理學士の發見せるグロビゲリナ泥灰岩あり、この中に含有する有孔蟲化石の研究豫報は既に臺灣地學記事第一卷第一號に報告せし如くにして該岩石は恐らく古第三紀の者なり。更に早坂教授及丹理學士の報告せる臺北州羅東郡蕃地シーセン附近の埔里層中のグロビゲリナ石灰岩は多分霧社產の者と同時代の者なるべし。

斯く始新期化石は埔里層中に廣く分布し且つそれより古き時代の確證なき今日、埔里は從來考へられ來りし如く古生層及び中生層には非ず始新期層と考ふべきなり。而して又春菜山脈數次の横斷路に於て調査せる處によれば埔里層と結晶片岩との間には確然たる境界なく埔里層中の始新期化石は著しく變形し又は破碎し、其母岩は又片狀を呈し又之等の地層に接近して片狀花崗岩及び片狀玲岩等の挾在するあり。猶粘板岩中に挾在する礫岩（高雄州屏東郡蕃地瀧見駐在所附近）中には結晶片岩礫を含まざる等の事實により埔里層と結晶片岩とは別個の地層に非ざるものと觀察す。即ち臺灣春菜山脈を構成する是等の地層は下部程著しき造山力を受けて變質の程度高く結晶片岩に變せる者と思考せらる。

昨年及今年度の觀察及び内業に於て得たる結果を總括し臺灣嶋の地史を解釋したる其要項は既に兩人の名を以て帝國學士院記事第六卷（一九三〇）第八號三一三—三一六頁に發表せる所なり。

尙兩年度に於て蒐集せられたる資料の研究は目下進行中にて其結果は逐次發達することあるべし。

他に東北帝國大學理科報告（地質學）第十四卷第一號（昭和五年）を添付す。

研究者　神戸　藪田貞次郎　勝二

（推薦者　小野塚東大總長）

ゴム種子の成分及び其の利用に關する研究

研究報告　未提出

癌腫の實驗的研究

研究者　會員　山極勝三郎
（申出者　本人）

長與又郎氏より提出ありたる論文左の如し。
一　山極勝三郎、塚原重雄、森本茂喜「マウス癌抗體發生に關する實驗的研究（第六報）」（日本病理學會々誌第十九年別刷）、「二十日鼠の移植癌（偶發乳癌及タール癌）に對する抗體發生に關する實驗的研究（第七報）」（日本病理學會會誌第二十年別刷）

呼吸色素チトクロームに關する研究

研究報告　未提出

研究者　矢追秀武
（推薦者　小野塚東大總長）

有栖川宮記念奬學資金の部

國語の表現法と日本人の思想形態に就ての研究

研究者　城戸幡太郎
（推薦者　松本（亦）會員）

研究報告として「國語の表現法と日本人の思想形態に就いての研究」概要報告並に其の附錄の提出ありたり。

山陵に對する思想の沿革の研究

研究報告　未提出

弘明集及び廣弘明集の研究

研究者　芝和　田葛盛軍一
（推薦者　三上會員）

研究者　常太　盤田大悌定藏
（推薦者　姉崎會員）

弘明集
廣弘明集　研究經過報告（第二年）目次

弘明集研究

第一　の研究の現況
一　法隆寺藏古寫本校合
二　故事、典據蒐集の狀況
三　カードの增加、故事人名の分布狀況
第二　思　想
一　排佛の論據
二　神滅及神不滅の問題
三　報應論
四　三教の關係

（イ）牟子―理惑論
（ロ）宗炳―明佛論及　孫綽―喻道論
（ハ）何承天對顏延之―達性論（儒と佛）
（ニ）張融對周顒―門律及夷夏論爭（道と佛）
（ホ）其他

廣弘明集研究

第一　研究の狀況
第二　本書の組織及內容に就て

列聖及皇族御撰の研究及出版　研究者　會員　和田英松

（推薦者　三上會員）

研究報告　未提出

東照宮三百年祭記念會推薦の部　一部　二部

源氏物語諸註集成　研究者（外）藤村作　一名

（推薦者　小野塚東大總長）

昭和五年度に於ける源氏物語諸註集成に關する研究は、前年度に繼續して先づその第一期計畫たる「河內本源氏物語」の本文校訂の完了することに努め、併せて第二期計畫たる「青表紙本源氏物語」の本文校訂及び諸註集成を完成せしめむことを期して今日に及べり。今その經過の概要を報告すれば左の如し。

（一）河內本源氏物語の本文校訂

（イ）諸本の整理と謄寫

前年度までに調査を完了したる源氏物語古寫本約三百部一萬册中より、河內本なりと信ずべき諸本を分類整理して謄寫せり。

（ロ）底本の淨書

右河內本中、最も重要なりと認めらるゝものを選びて底本とし、これを原稿用紙に淸書せり。全部五十四帖、紙總數約三千枚なり。

（ハ）諸本の校合

右淨書本には同系統なる河內本を參照して綿密に校合したり。その主なるもの左の如し。

1　前田家本
2　曼珠院本
3　平瀨家本
4　靜嘉堂文庫本
5　肖柏自筆本
6　傳爲家自筆本
7　鳳來寺本

8　高野辰之氏本
9　東京帝大國語研究室藏の抄出本
10　京都帝大藏の一本
11　池田龜鑑架藏古寫本五種

（二）湖月抄本との對校

右河内本の校合本は、これを異系統なる湖月抄の本文と對校し、その異同を首部に注記せり。湖月抄は系統不純にして善本となし難きものなれど、從來最も一般的に流布せし通行本なれば、今便宜之によれり。

（ホ）諸抄に引用せる河内本の本文との對校

右の校合本には、河内本の本文を引用せる諸抄中、左記の數種を選んで、その本文を校合せり。

1　原中最秘抄
2　紫明抄
3　河海抄
4　花鳥餘情
5　源語秘訣
6　千鳥抄
7　仙源抄

（ヘ）古來の諸註中、河内本の本文なりとて頭又は傍に抄記したるもの、抄出

右は代表的なる註釋書三十種凡そ一千册について抄出したり。

（二）青表紙本源氏物語の本文校訂

目下續行中

（三）諸註集成

目下續行中

右の如く源氏物語に關する研究は、第一期計畫ほゞ完成し、第二期以下の計畫も、漸次進行中なりと雖も、源氏物語はその量大にして、研究も亦容易に進捗せず、一部の書寫、校合のみにても、實に十ヶ月の月日を要し、簡單に之を處理すること能はず。しかれども過去四ヶ年に亘る研究によりて、從來不明なりし河内本諸本を新に發見せしもの多く、これが本文を明かにすることを得、又所謂青表紙本にして以て證本となし得べき鎌倉期の古寫本をも發見してこれが本文を明かにすることを得たるを以て、これ等兩系統の本以外の諸本の面目をも推定することを得るに至れり。又この外、源氏物語に關する諸種の疑問にして、今日までに解決し得たるもの甚だ少しとせず。源氏物諸註集成の事業は、校本萬葉集の事業に比して一層大にして困難なる事業なれば、今後猶一層奮勵努力して豫定の計畫を遂行せんことを期するものなり。

寺院門前町の研究

研究者　平沼淑郎
　　立花喜美
（推薦者　高田早大總長）

「昭和五年度寺院門前町研究報告」の提出ありたるも長文なるを以て採錄を略す。

農村社會生活の統計的研究

研究者　那須皓
（推薦者　小野塚東大總長）

昨昭和五年度に於ては山形、新潟兩縣當局と協議の上、兩縣下の山村二ヶ村、海村二ヶ村、平地農村二ヶ村計六

ケ村を選定し、新たに增訂せる調査項目（別紙附表參照）によりて、精細なる戸別調査及び總括的調査をなしたり。調査に從事せるもの調査主任者たる小生以外に四十六名にして、此等人々は六班に分れ各約二週間宛（自六月三十日至七月十二日）下記農村に滯在して實地調査に從事したり。其の調査戸數合計五〇一戸、調査人員三二〇一人に上る。調査の結果は歸京後約半歲の間に、原稿紙千數百枚に達する報告書及び約百枚の同概要に之を取り纒め、更に數字に關しては三十枚の統計表並に五枚の圖表を作製したり。此等と昭和三、四年度に於ける調査の結果とを併せて東日本農村に關する綜合的研究を試みたる後、之を順次印行出版すべく目下計畫中なり。

農村實地調査地名並に調査員々數

新潟縣東頸城郡牧村字字津俣（山村）　八名
新潟縣三島郡日越村字堺（平地農村）　七名
新潟縣佐渡郡加茂村字椿北五十里（海村）　九名
山形縣西田川郡豐浦村字堅苔濟（海村）　七名
山形縣西田川郡東鄕村字天神堂尾花（平地農村）　八名
山形縣西村山郡大谷村字大暮山（山村）　七名

外に「農村社會生活調査項目（昭和五年七月）」を添付提出せり。

電氣探鑛法に就きて

研究者　藤田義象（推薦者　新城京大總長）

研究報告　未提出

コンクリート强度を目的とするを試驗方法

研究者　濱田稔（推薦者　小野塚帝大總長）

一　現在のセメント試驗方法（標準規格）による强度とコンクリート强度との對比
結果―右の事項は普通ポルトランドセメント、高爐セメント、高級セメント等の如く各セメント種類別にすれば相當規則正しき關係式を得ることを知り其式を定めたり。

二　一の事項をセメントの種類別にせずに一括して一つの式で示さんとする工夫
結果―セメント試驗方法（標準規格）による强度の早期の値とコンクリート强度の長期の値とを對比すれば或程度其目的を達し得ることを知れり。

三　二の事項に對しては現在のセメント試驗方法を廢し著者提案の小型軟練モルタル（w/c をコンクリートと同一にして）によれば極めて合理的に達し得られる。而して先づ其新試驗方法に新し誤差のなるべく少き操作方法を研究し略其要點を確めたり。
目下其方法によりコンクリート强度と對比研究中なり。

緩衝劑の研究

研究者　柿内三郎　宮本璋（推薦者　小野塚東大總長）

研究報告　未提出

禾穀類に於ける遺傳學的並に細胞學的實驗

研究者　木原均（推薦者　新城京大總長）

本研究成績の一部は日本遺傳學會第三回大會に於てその概略を報告し目下本論文の起稿中にして、近く遺傳學雜誌上に發表の豫定はり。他の一部は未だ實驗研究中なれども其の成績の發表も亦遠からずと信ず。

實驗的黴毒（特に潛伏性黴毒問題）

研究者　松本信一（推薦者　新城京大總長）

一「スピロヘータ」の染色的研究　皮膚科紀要第十六卷第一號
一　黴毒、「フランベシア」の交互接種及「フランスベシア」並に黴毒の重感染試驗　日本黴毒學會雜誌第五卷第一號
一　實驗的黴毒に於ける「マイニツケ」反應　日本黴毒學會雜誌第五卷第二號
一　黴毒免疫家兎靜脈内に注入せる「スピロヘータ、パクダ」の運命について　日本黴毒學界雜誌第五卷第三號
右論著の一部分及び以前の研究を總括的に記述し英文にて出版せるもの次の如し。
Matsumoto: Experimental Syphilis and Framboesia etc.
別に「家兎背部皮内に浸潤注射せられたる「サルバルサン」の黴毒並に「フランベシア」感染に對する豫防力に就て」（皮膚科紀要第十五卷第五號拔刷）、「再歸熱「スピロヘータ」の染色的研究（二）（同上第十六卷第一號拔刷）、「「スピロヘトーゼ」免疫の研究（第一回報告）」（同上第十六卷第二號拔刷）、「「スピロヘトーゼ」免疫の研究」（第二回報）（同上第十六卷第三號拔刷）並に前掲英文出版物を添付提出せり。

稻の開花に對する外界の影響に就きて

研究者　野口彌吉（申出者　本人）

研究報告　未提出

副腎よりのアドレナリン分泌に就きての研究

研究者　佐武安太郎（推薦者　井上東北大總長）

研究報告　未提出

本邦風土及風景に對する和洋兩服裝の衛生的研究

研究者　戸田正三（推薦者　新城京大總長）

「中等溫度、有風、靜止の場合に於ける和洋兩服の保溫效果に就て」（國民衞生第六卷第十二號第七卷第五號拔刷）の提出ありたり。

冶金爐内の化學的變化に就きて

研究者　渡邊俊雄、和邇完爾（推薦者　新城京大總長）

研究報告　未提出

昭和六年四月

東京市下谷區上野公園地

帝國學士院

電話下谷(83)四〇番

東京市麹町區内幸町一丁目四番地

ヘラルド社印刷所

終